川柳塔

昭和五十六年一月二十五日　印刷
昭和五十六年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六四五号

日川協加盟

No. 645

二月号

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話（779）1690～2番

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 鳴門
政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに
観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み■南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

南海電鉄

三か日買い溜めに孫ら容赦なし

お年玉誤算があった孫の顔

お年玉順番に孫らもつれあい

猿真似でピョコンと頂くお年玉

一年の計喝采はあっても型どおり

中島生々庵

デタント

歳が改まると云って騒ぐこともないだろう。三六五日目に来る一節にすぎないでないか、といやに行いすました顔もよかろうが、遠い時間をふりかえって新しい将来に夢を追うてみることも亦楽しいものであると私は思う。12月28日だったと記憶しているが、NHKの山室解説委員と外3名のゲストが国際状況を語り合うて、過去一年は相互信頼に乏しく危惧の念が続いた歳だった。互に正しく理解してゆくべきであると、デタント（緊張緩和）という言葉をくりかえしながら、今日の日本は乱気流に突入している、日本はベルトをしめなおさねばならぬと強調していた。私は勿論、政治、殊に国際関係など皆目であるが、デタントという言葉の中に、現在おかれている川柳界の一部にも共通な感じとしてうけとられる恐れなきにしもあらずと、妙に印象的であった。これは、私の頭の回転の悪さ加減だったのだろうか。

座右の句

恋人がいま肉眼に入り来る　（薫風）

私の句

氷屋がまともに濡らす昼下り　桑原道夫

川柳塔　二月号　目次

デタント……中島生々庵…（1）
長寿万歳……若本多久志…（2）
■川柳太平記33　川柳を狂句と呼称宣言……東野大八…（24）
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（一丁）……（26）
川柳塔（同人作品）……中島生々庵選…（4）
水煙抄……菊沢小松園選…（28）
秀句鑑賞「同人吟……阿萬萬的…（23）
　水煙抄……小林由多香…（35）
路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表……（36）
病中柳感百度の記……東野大八…（38）
英訳俳句・川柳をめぐって……竹内紫錆…（43）
愛染帖……橘高薫風選…（40）

長寿万歳

若本多久志

最近のある学説によると、人生を四期に別けて二十歳までを幼少年期（基礎育成時代）三十五歳までを壮年期（試行錯誤時代）六十五歳までを熟年期（完成時代）八十歳までが死亡適齢期（余生時代）だというのである。

この適否は別として、私は今年、その余生時代のピークに立つ八十歳（数え年で）を迎え、神仏のご冥加を有難く思うと共に無量の感慨に耽るのである。

そもそも、人間不老長寿への願望は、古代中国に最初の統一帝国を創りあげた始皇帝以来、幾多の権威者たちがあらゆる手段を労しても求めて得られなかったことだとすれば、我々凡夫は初めからそんな愚欲は捨てて、自然のままに自己の努力をも重ねて与えられた生を享受すべきだと考えるのである。

そしていつの日か、ローソクの灯が消えるようにわが家の畳の上で、天寿を全うし、心安らかな大往生を遂げることこそ最大の幸福ではなかろうか。

昨年、厚生省の発表した日本人の平均寿命は、女子79・89歳、男子73・46歳で男性は世界第一位、女性は第二位となっている。勿論こ

さよなら津田与史さん……野村太茂津…(45)
高橋可保留氏を悼む……尼緑之助…(46)
嗚呼　堀口塊人さん……橘高薫風…(48)
初歩教室……本田恵二朗…(50)
大萬川柳「出直し」……川村好郎選…(52)
一分間の柳論……高橋夕花…(51)
雅号ぶっちゃけばなし……江口度…(67)
柳界展望……(56)
本社新年句会……(59)
各地柳壇……(佳句地10選)都倉求芽選…(62)
「有名」……原独仙選…(54)
一路集「寒い」……小島蘭幸選…(54)
「見舞」……神夏磯道子選…(55)
編集後記……(酔々・鬼遊・史好・薫風)…(69)

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い　（路郎）

私の句

蜘蛛の巣へ風逆らわぬように吹き　高田博泉

れは近代医学の恩恵にもよる処であるが、この年齢を越えてなお余生を楽しんでおられる人々の話を聞いてみると、やはり前記の無理をしない自然の生活に、若干の自己努力を重ねておられるようである。

その一例として、昨年二月モンゴルで百回目の結婚記念日を迎えた超老夫婦の話が、ニュースとなって世界の人々を驚かせている。お爺さんのアチバジュさんは百十五歳、お婆さんのチャミラさんは百十五歳。十代の結婚だから一世紀の年輪を重ねた尊い記録だといえよう。

この夫妻がここまで健康を保ち続けた理由は、まず気候のよさ、体に合った食生活（バランスのとれた）家畜の飼育という仕事（運動）の三点だと言われている。

昔、大隈重信が人寿百二十五歳説を称えたが、むべなる哉と言いたい。

最後に、西洋医学導入の先駆者として不朽の功績を残した江戸末期の蘭医杉田玄白の健康七不可訓をご紹介してペンを置こう。

昨日の非は悔恨すべからず。明日はこれ慮念すべからず。動作を勤むるに安きを好むべからず。飲むと食すとは度を過すべからず。正しきものにあらざれば卑しくも食すべからず。壮実に頼りて食を過すべからず。事なきときは薬を服すべからず。

長寿万歳　まだ食欲は熟年期　多久志

中島生々庵選

折角の素顔のよさを塗りたてる　大田市　藤田軒太樓
年越しの見通しついた酒の味
逃げの術を打つ頃合と年の功
頑老と見たか鉾先妻へ向け
貫禄に押され舌鋒かげ薄れ　和歌山市　津田与史
反省のひととき蟻の道を追う
成人式日本を背負う顔でゆく
間違った地図渡された日の不覚
流れには乗れない雑魚の捨台詞
十本の指ある限り敗けられぬ　宝塚市　傍島静馬
歳月は俺の都合を待っていず
仕事と趣味ごっちゃにするからややこしい
負けずぎらいもステッキたよる年令になり
立ちぎわのヨイショを孫に真似られる
言葉づかい敬語に変って電話切れ　青森市　工藤甲吉
あきらめたことを自分に言い聞かせ
眼鏡更新入歯更新佗しがり
お見舞の人に迷信持ち込まれ
牢獄につながれている純血種
ふるさとにトンテンカンがまだ残り　高槻市　若柳潮花
分家から抜け家元で名を貰い
鍵になる子に親が泣かされる
盛塩を流す宗右衛門町の雨
母と居て昔語りにする午砲
テレビまで色がしらけて来た師走

尼崎市　黒川紫香

うすくなる頭叩いて詫びておく
また切符入れたところがわからない
人違いしたのと並び乍ら行く
削っては埋めて地球は丸くなる
無人駅一人を降ろす月の影

岡山市　川端柳子

お日さまが愛の行脚をして暮れる
見込まれた分の笑顔を絶やせない
駄目な子と言えぬわたしにある弱味

足摺岬で（二句）

御一行様でぞろ〳〵蟻の列
金塊が沈む夕陽の水平線

倉敷市　野田素身郎

今だから笑って傷痕見せられる
随行の悲しさ今夜は酔えぬ席
待たされたあげく決裁もらえない
何をまたジョギングウエアなど着込み
方言もまじえ陳情申しあげ

堺市　高橋千万子

本心を知りたし少しおこらせる
来年と云う逃げ道はありはあり
財布よりメモが大事な落しもの
出来心でもよし善意に背伸びする
除夜の鐘きいて日めくり役終る

富田林市　岩田美代

それなりに木枯し人を恋うている
やさし瞳私にとまどう事ばかり
法善寺女は疲れ切っている
新春なれやきれいな生きざま考える
新春の鶏私の夜明けを告げに来た

大阪市　金井文秋

趣味を持つゆとりもあって小商売
もし病臥すればの不安もって生き
値段据置きで中味が少し減り
頑固者和解せぬまま死んで行き
底冷えの夜は風呂屋へ駈けて行く

倉吉市　奥谷弘朗

そそくさと来て奥さんの長話し
人様の目にはゆとりとしてうつり
お喋りが過ぎて結論出ないまま
手探りで行く人生に味があり
覗きにも来ない別居に愚痴が出る

兵庫県　遠山可住

定期券目をさましたら駅に着き
まっくらな海へ出て行く勇ましさ
まちがいの電話の声がきれい過ぎ
迷よて来た小犬へ玄関しめられず
落ちるとき風の誘いにのった花

奈良市　森田カズエ

出直しのきかぬ男が持つ軍歌
和箪笥もいっぱい詰めて娘は嫁ぎ
世渡りの上手い男の百面相
君 僕と呼べない友がいる名簿
手術台入れ歯はずした顔哀れ

神戸市　仲　どんたく

残り茶のごとく味濃き古稀と言う
千万のミンクで包む価値ありや
超高層並んで鯰の笑い声
ニヤミスでこんどもくじが無事はずれ
タンスの香三三五五の初詣で

今治市　長野文庫

毒舌の対談NHKを食い
意気地なく安らぎ求めUターン
陳情ははちまき締めておどかす気
大往生流れのままの八十余
お買得のビラの本音はお売り得

大阪市　江城修史

恩師逝く（二句）

再会の約束空し雲の峯
傷心へ答える様に枯葉散る
石仏に木もれ陽ぬくし高野山
生きる嘘小さな倖せ守る嘘
赤旗も振れず居職の灯を守る

大阪市　室谷徹舟

健康て素晴しい屠蘇の味
よい事を聞く耳だから掃除する
歯刷子をやせた歯ぐきに合わせ選る
白髪染め使う程にも髪がなく
夫婦坂死ぬまで上り坂として

岸和田市　高橋操子

被災地の雪よあまりに残酷な
顔顔顔働く生気みるラッシュ
若人のひま暴走とはかなし
少年の瞳よ世界地図を追う
化粧くずれの顔から歳が読めました

岡山県　嘉数千代香

忘れたい傷を意識ののぼり坂
云い敗けておいて寝返りばかり打つ
狂えない石で枯葉にいたわられ
信念を貫く雑魚の道はるか
悔い一つない背水の陣を布く

松山市　谷心府（真風改め）

妻に病まれ茶碗も洗う寒の水
病人へ癌とは言わずこんな嘘
当てのない慰め花が咲いて散り
蝋燭の灯と線香とひとりの夜
落椿しずかに在す観世音

守口市　野呂右近

雑草も堪えねばならぬ冬が来る

ビルの巣で働き蜂を待つ夕餉

来る処迄来た感じ総入歯

金ですむ話でないがと金を取り

寝た筈の妻が知ってた盗み酒

藤井寺市　児島与呂志

きびしい背延ばして冬の陽は弱い

冷たい手母の温くみが話しかけ

水の色だんだん深い冬になる

笹の葉の雪はそのまゝ凍てゝくる

若い芽を育てる露地に嘘が無い

米子市　八木千代

山肌のなみだも吸うて苔の花

慟哭を抱いて砂丘冬に入る

揉めている土地で雑草花をつけ

初姿老女の眉もととのえり

終止符もわたしの指で打つつもり

三重県　川上渓水

母を描く顔が淋しい施設の子

金策の膝とは知らず猫がのり

罪一つ消したつもりの募金箱

愛の巣のローン気にして倦怠期

肩揉めば母涙ぐむ齢になり

八尾市　高杉鬼遊

世の中は混沌として風呂の首

濡れ衣も三途の川を渡りかね

国が売るけむりを白い眼で見られ

またしても値上げ追いつく稼ぎなし

にんげんに頭が一つ貧富の差

八尾市　高橋夕花

風のように花のようには生きがたし

凍てついた心にやさしい人の文

思惑をあきらめ仰ぐ冬の塔

頬杖を解いて師走の街に出る

足踏みをしたい日もあり十二月

島根県　堀江正朗

酒を酌ぐ音がいちばん好きな音

想像の顔で逢うてる懐しさ

風の音寒さを耳に持ってくる

冬のきた音と抹茶の点つ音と

熟睡を起した風は雪を連れ

倉敷市　稲田豊作

督促に行き長々と嘘を聞き

逃げ道の中途で善人引き返えす

失言を詫びると握手が待っていた

新語出て私も死亡適齢期

敬老会来年逢えぬ人は誰

松江市　梅本登美也

絵心があればと思う景に佇ち

ある人を心いそいそ待つロビー

蒸発の母を涙で子が招く

米びつを覗く癖あり手内職
結局はマナー疲れのフルコース

岸和田市　原　さよ子

ポケットの銅貨さがしている御神前
七五三神主さんもうれしそう
神様にだけは特級あげておく
冗談に本心混ぜて酒をつぐ
温泉でしみじみ歳を知る素肌

島根県　堀江芳子

再会の握手のように持つ受話器
ふたり診てもらう日心細いこと
筆不精書きはじめると長くなり
口だけの若さを夫は笑わせる
スランプを笑って地球冬にする

大阪市　大坂形水

風向きを計算に入れ抜くクラブ
狙ってるわけではないが芝を読む
気紛れなボール道草ばかりする
バンカーの打数を烏知っている
はっきりとラストコールで己れ知る

富田林市　板尾岳人

雪景色ポケットに入れて売りにゆく
二ん月の雪のいのちは短くて
雪に画く母と云う文字美しい
雪やがて父の呼ぶ声聞くのなり
母の手の温くみに似たり山の雪

竹原市　小島蘭幸

ヘルメット部隊が行くよ十二月
実家まで行ける中古車ならばよい
オモチャのマイク片手にこの子おしゃべりで
空中ブランコ子の瞳妻の目私の眼

松原市　谷垣史好

人情が乾くと犬も尾を振らぬ
冬の蚊よ俺も逃げ場のない書斎
心臓も拗ねているのか不整脈
男ひとりちりめんじゃこで飯を食う

鳥取市　小林由多香

過去捨てるひとりの旅は雨がいい
お通夜の涙も涸れて酔いまわる
耐えて来た怒りへ咳が止まらない
ごまかしのきかない顔で俺に似る

京都市　都倉求芽

男五十まだパズルから抜け出せず
五十坂必需品となった爪楊子
西高東低葬儀の涙も吹きとばし
突然に今年は達筆で来た賀状

倉敷市　水粉千翁

女から捨ててきりりと束ね髪
禅寺の出会いの風のまろさかな
表から裏へ筒抜けして平和

お見合いへ励ますしつけ糸を抜き
姫路市　植村客遊子

神妙な顔で祝福されている
甘酒の粧へ妻は孫を待つ
浪曲と艶歌チャンネル折り合わず
髪染めて出るから皆にうたがわれ
出雲市　原独仙

四股踏んで米寿へ挑む新春(はる)や佳し
凪つゞく日本海の蒼不気味
年金日孫がべんちゃらあのねのね
三姉妹歳末売り出しともいかず
島根県　小砂白汀

寒月よ哭くなつららが地にとどく
呼び捨てに叱ってくれる者も絶え
泣くものの居らぬ天寿は悲しいね
降るときに降る雪なれば愛でられる
広島県　山内静水

忙中閑日日新たなり十二月
苦労した頃が良かった若かった
六十の情熱火消つぼで燃ゆ
おかげさまの一語につきる春やはる
泉佐野市　阿萬萬的

聞き上手目立たぬ人で生字引
アハハハハと笑える嘘なら僕もつく
大和随想

黄昏れるそこから奈良は化粧する
正倉院の青磁は古代史のこゝろ
竹原市　森井菁居

厳しさに逢いたくて撰る回り道
三代が何とか住んで春を待つ
合理化の矢おもてに立つ会計課
改札を出て旅人の貌になる
松原市　玉置重人

代打が控えてるぼやぼやしておれぬ
真相の中にかくれていた善意
八方美人キッチリネクタイしめている
やめて一年会社の空気変ってた
羽曳野市　塩満敏

そのうちにそのうち当る宝くじ
横綱を倒した汗にマイク向け
同窓会酔えば旧友よみがえる
坂道の上り下りで違う汗
大阪市　川口弘生

嫁き遅れもう釣書も書馴れる
鍵っ子へ帰心まっすぐ親心
芋粥の楽しみあった寒稽古
高血圧の母が絶やさぬ菊作り
大阪市　本多柳志

孤立して都心をにらむかかしの目
閑居してくしゃみ大きく活きている

右こ左べんしてわが道は見つからず
野良犬よ都会でめしが喰えるのか
和歌山市　内芝としよ

こぼれ陽のなさけへ雑草楚々と伸び
珍客へ隣に知恵を借りにゆく
休みないお針師走の夜に耐える
詫びる気へプライド邪魔な顔を出し
和歌山市　垂井千寿子

幸な時だけ人生語る人
人生の終着駅の灯を捜す
走ってもこけても佛の手の中で
鉄瓶のたぎるリズムに和を見付け
大阪市　西森花村

泉水の中に浄土の塔の影
記念撮影立入禁止も写ってる
食欲も話もはずむ婦人会
日記帖十二月から復活し
大阪市　河井庸佑

一隅に逃げ道空けて追いつめる
横綱相撲相手に言わすだけ言わし
決然と流れに棹さす旗を上げ
少数意見キラリと光るを見逃がさず
大阪市　天正千梢

海綿が水吸うような苦学生
板につかぬ駆引きに疲れ果て
脳活動は財布と直結し
身に過ぎた野望曲り角で消えていた
京都市　山本規不風

おだやかな言葉に苦労を耐えた味
逆わぬ妻になったを淋しがり
用ないのに来た孫にある下心
ほとぼりが醒めて食べてるにぎりめし
米子市　佐伯越子

樹の精が舞ってるように紅葉散り
出稼ぎの心をゆする日暮れ時
除夜の鐘夜勤の夫を思い聞く
伝説の鐘の余韻に霧しずむ
寝屋川市　江口度

ひと言の重さを置いて医者帰る
呼び捨てにされて他人のからがとれ
前向きの言葉に酔うている社長
うぬぼれがあるので結構生きてゆけ
奈良市　宮口笛生

自販機に馴れて無愛想にも馴れて
正月の車はみんなのんでいる
職退いてから出嫌いになってくる
温泉も馳走もしんどいだけの旅
倉敷市　小幡里風

方便の嘘をつけない苦労人
鈍行の浅い眠りが乗りすごし

マイペース乱して時の人となる
人間のペース狂わす札の束

八尾市　飯田悦郎

土掘れば土生きている香りあり
眼を閉じて亡母の小言近うする
久し振り会えば話は酒になり
ひねくれた鉢植だけが先きに売れ

松江市　小林孤呂二

冬来たり冬の仕度は妻と割け
より妻らしくより母らしきせち料理
決められただけは役人真面目なり
鷹の子でだんだん距離が遠くなる

鳥取県　林露杖

街路樹の枯葉師走の音で鳴る
童唄きこえて来そう落葉路
鴛鴦の番番に冬日射す
縄のれんジングルベルを聞き流し

平田市　久家代仕男

団交がこじれて続く握り飯
荒磯のしぶき届かぬ句碑の位置
碁仇の来る日留守居を引き受ける
山茶花の白に還らぬ人を恋う

奈良県　村上春巳

貸す金が少しぐらいはある晦日
デパートから帰った露地の賑やかさ
明日あるを信じ星降る夜泣きそば
雑炊へ並んだ頃の生甲斐よ

八尾市　香川酔々

なごやかな微笑踏絵のマリアさま
志望校きめかね脇のゴマをとる
湯豆腐を囲む老いたる影法師
合格を母にまかした百度石

倉敷市　田垣方大

議員さん祝辞だけでは物足らず
足摺の夕陽海を沸かすよう
定退後錨おろせぬ人ばかり
荒巻きが泳ぎ疲れている歳暮

松江市　舟木与根一

奈良東大寺にて（二句）

運慶の阿吽の呼吸へ身が締り
大仏の膝のあたりへ合掌し
よく見れば日溜りの土方歳をとり
よれよれの紙幣が混じり十二月

宇部市　平田実男

終りなき刑期聖書を読み返し
詐欺師の話術実印を誘い出し
カレンダーだけが替ったお正月
妻にかしこまられ元旦ちと慌わて

東大阪市　竹中綾珠

退院の我が家やっぱりよく眠れ

電気毛布ひとり寝の寒さ忘れさせ
泣き言は言わず頑張る寡婦の意地
札束で大臣出来たり消されたり
鳥取市　有田とし江

愛の巣を小鳥台風に持ってかれ
戸をたゝく風も師走と云う風か
幸運の手相信じて爪を切る
音もなくしのび寄る老寂しくて
大阪市　柳原静香

雑草の花咲かぬままもう六十路
いきごめば背骨が哀しい音を立て
ひとり来て団体客にまき込まれ
雨男の夫をうっかり誘い出し
東大阪市　市場没食子

古書新書子は子で己が道拓く
同居には向かぬ建売ばかり建つ
悠々自適出しゃばる癖はそのまんま
学友も戦友も減り我れ傘寿
兵庫県　大江秋月

耕三寺去年の位置に山椒魚
耕三寺仕合わせそうに鯉泳ぐ
浴場で背を流しつつ大鳥居
原爆へ再起の市民に拍手する
姫路市　梅谿庵不酔

新天地希望に充ちた草鞋履く
飲め飲めと酔わして俺に払わす気
倒産へ亀と兎の駈けくらべ
猫なでの可愛い口から毒牙見え
鳥取県　鈴木村諷子

ふとん着てあるかないかの量で寝る
品行は方正にして意気地なし
年だけは文化勲章並となり
地下足袋の暮し奇跡を望まない
米子市　小西雄々

内科外科泌尿器科まで世話になり
賞金につられプライバシー恥じず
筆先に心つたえるように書き
石畳歌ほどロマン湧いてこず
鳥取市　岸本無人

門前が栄えて本尊忘れられ
休日の出勤守衛と将棋さす
折れた矢が師走の街に落ちてくる
渡り鳥休んで行きたいとこがあり
鳥取県　森田布堂

生きている生かされていて春めぐる
俺の墓俺が建てると子へ不信
初雪を屋根に大阪行が発ち
めぐり来た春の小鳥の讃歌聞く
西宮市　藤村〆女

松の内明治が生きている我が家

知らぬ間に我が家のルール孫が決め
立飲みのどの横顔も小市民
縄のれん同じ時刻に同じ顔

和歌山市　若宮武雄

見返りは何であろうと親の役
無芸無能だから大難大過ない
眼が弱くなって読みたいものばかり
突っこみへ呆けをつとめてくれる妻

大阪市　本間満津子

夜更けのふろ思いとろとろ湯に溶かす
人の夢喰って太ってゆく都会
耳鳴りのする日不安な影法師
夢のなきがら八つ裂きにする宝くじ

岸和田市　狭間希久志

縺れ糸未練な老でたち切れず
あの橋を渡れば過去が戻りそう
萎びても乳房は過去を悔まない
精一杯我慢している寝たっきり

出雲市　板垣夢酔

考えているかと思えば寝てござる
二級酒に替ったことを下戸が知り
亡き友の表札のまま寡婦のまま
成歩金　金で生れた貌をする

笠岡市　松本忠三

じゃんけんの握り拳をどう開く
催促をしたようですと猪口を出し
油断させるのも女房の得意技
サングラス色盲なのか夜の街

大阪市　津守柳伸

衣食住足りて気づかぬ落し穴
なるようになって晦日が通り過ぎ
省エネに早寝遅起考える
慣習にしがみついてる小商人

鳥取市　両川洋々

同情にすがる踏み絵は妻と踏む
負け犬の靴を黙って妻磨く
保険屋に俺の命はこんなもの
男ですあゝ札束へ尾は振らぬ

岡山県　岩道博友

道連れが一言多く自慢する
力んでも同じ答案しか出ない
回り道日記へ残す記事が出来
落ちこぼれ種の勝手は芽をのばし

姫路市　大原葉香

電話では言えぬ言葉の便り来る
一枚の葉書きに個性はみ出せり
ワキ役の一生妻はいぶし銀
遮断機にやる気満々くじかれる

橿原市　岩井本蔭棒

捨てられたあとも空かん邪魔がられ

ジョギングが老後に良いの悪いのと
糟糠の妻同権をよろこばず
篤農家雨には雨の予定表

仙台市　川村映輝

お日様が邪魔になるほどよい天気
兎小屋でよし私の建てたもの
顔剃れば若き日の顔のぞいてる
居眠りとテレビと暮らす不倖せ

大阪市　河野君子

当てになるのは今日のひと日と思うべし
自分を騙してみたいと思う昼の月
下り坂業のからくり見えてくる
喜劇のまま今年も幕を引く夫婦

島根県　大野酔夢

再婚の未来へ虹の扉が開く
貧乏を知った息子へ送る詩
難民の疲れた顔が平和待つ
信心の弱みへ神を稼がせる

神戸市　山口美穂

鏡台へもう泣かないと言うておく
なぜかさみしく猫の昼寝の邪魔をする
さりげない言葉で愛を確かめる
横顔のかげり私の胸痛む

兵庫県　辻文平

妻や子に見せぬやさしさ菊手入
書を閉じて孤独に馴れた月を見る
野仏の空ほんとうの秋になる
メモ帳に何か書かねば淋しい夜

大阪市　神夏磯道子

やがて悔いる愚痴と知りつつ、性悲し
かざぐるま弱い風には巻き返す
きっかけが掴めて雲が美しい
星まわりい、来年を信じます

新宮市　大矢十郎

ふる里の狭さへ喜々と三ヶ日
欲を持てなどと腹立つ事を云う
街路樹の落葉よそこは居辛らかろ
吉日をたしかめもせず祝い物

島根県　榊原秀子

愛情で包めば応えてくれる嫁
時雨未だ止まぬに対話もうとぎれ
通せんぼされてもされても抜けた道
晩年をたゞ淡々ときてしまい

羽咋市　三宅ろ亭

ショルダーの買いもの女夕急ぐ
鉄ビンの湯気と対話の留守ひとり
鱈もよし海鼠もうまし能登に冬
瞼裏さみしきときは父母に会う

松江市　柳楽鶴丸

かわいい嘘につい買わされる

初対面は冷めたそうに見える妻
ちょっぴり可愛いい妻の悪女ぶり
恋人同志と娘達にひやかされ

島根県　角　耕　草

息かけて霜やけの手を包みこみ
出稼ぎの前にさせとく冬田打ち
豆を撰る祖母にやさしい陽があたり
量り売る蜆が雪にこぼれ落ち

堺市　大　道　美乙女

これ以上追うと柩がすすり泣く
旧家にはゆるぎ知らない床柱
散る花に教えられてる人の道
彩炎えて木の葉ひたすら天寿待つ

大阪市　清　水　健　司

快心の仕事をすれば銭足りず
勇み足だったと気付く帰り道
ひとくぎりつけたらお茶がさめている
にわか雨相合傘も久し振り

島根県　錦　織　文　子

山頂で秋立つ色に包まれる
咲く彩を知らず蕾の挿されけり
この夜明け空気のうまい冷たさよ
炎えつきて紅葉初冬の空に舞い

大阪市　小　出　智　子

消火器が役に立たないままでよし
うっかりとおだてに乗っていた財布
大根が安くて母の上機嫌
偶然があるから夢が捨てられず

島根県　木　村　はじめ

健康のリズムを刻む児のいびき
除夜の鐘値上げ値上げと響くなり
四捨五入してマア〳〵の年のくれ
小さな灯ともし続けて遠い道

富田林市　中　村　優

核家族つなぎ合せた故里の初春
山盛りのみかんで炬燵よく笑い
お祖母ちゃんから子供に戻るお年玉
貧乏の頃を忘れた錦鯉

町田市　竹　内　紫　錆

球場の冬ジョギングの大き円
愚問だと思うマイクに逆らえず
声はまだ知らず筆者と編集部
排気ガス振り切りマラソンのゴール

出雲市　園　山　多賀子

雑魚だから魚篭の中でもよく跳ねる
三日月に鎌を預けて手を洗う
暮なずむ紅葉も褪せる柿のれん
お世辞云えない女正直売り物にし

松原市　北　野　久　子

好きで持つ針が貧乏性にする

お互に老けたと云わんばかりの眼
惚れているからペンが止らない
心臓をなだめて彼の噂聴く
和歌山市　坂口公子

万国旗もどき山の灯がきれい
閻魔様に横を向かれた果報者
人世の幕は錦の緞帳で
ベレー帽被れば古稀がうそになる
岡山市　花田たけ志

家風など下界に置いて翔んでいる
俎に乗れば通じる道がある
願望が叶えば自慢に変身し
ほど〳〵の幸運でよし貧に慣れ
岸和田市　古野ひで

ふるさとが恋しく切抜きためている
耐える事待つ事に慣れて丸く老い
おたがいに会釈の後をふりかえり
寝そびれて耳なりだけの夜しじま
桜井市　岩本雀踊子

これ以上嘘のつけない真人間
定年を祝ってくれるのも妻で
人嫌いめんどう臭い髭がのび
今治市　越智一水

暁の光信じて立ち向う
亡父に似た声を聞くのも旅のこと
灯明がゆれてる恋の影もゆれ
大阪市　欄蘭

本心を見抜かれ借りが出来た様
ポイ捨てへ道徳忘れた僕も居た
免疫になったか灰色にも叙勲
生駒市　草深酔升

ジーパンで肩組んだのもいる伊勢参り
波たててならぬ小言を噛みころす
鳥の餌ほどでとびきり味が良く
西宮市　島居白宗

冷夏暖秋紅葉促す富士颪（箱根温泉）
泉郷へわざわざ疲れに来たゴルフ（山代温泉）
色艶のよさは愛人ある噂
八尾市　内海幸生

やめさしてもらいま酒止すくらいなら
紅葉狩り亡母が散ってるように見え
味方だと思うから腹立ってくる
唐津市　新岡回天子

顧問とか会長とかで役ない世
手も足ももがれ盆栽生きて行き
十八番先に歌うたバスの仲
寝屋川市　宮尾あいき

病院の先生孫と同い年
冬到来知らせに木枯戸をたたく
泣いている私に人形笑いかけ

くりかえす振子のように運不運　米子市　林　瑞枝

陽だまりへつらい想い出避けて寄り
北風の似合う若さでペダル踏む　鳥取市　河村日満

すらすらと詫びる言葉が書ける老い
放蕩のむかしを恥じるうす笑い
しあわせの声は明るくよく笑い　和歌山市　福本英子

世界地図広げたままで暮れてゆく
紅バラを添えて病室白くいる
故与史さんへ
柳友の訃へ秒針とめた夜の雪　大阪市　藤田頂留子

秒針が句想浮かばぬまま進む
向うかて苦手と思ってるかも知れず
天気報無視したむくいのぬれねずみ　東大阪市　崎山美子

前向きに努力しますと言っただけ
パチンコへ定職のない列が待つ
前向きに生きる姿勢をほこりとし　下関市　国弘半休門

即興のアリラン海苔を髭にする
迷ったは道標を見ておらず
神代から鶏暁を告げている

ずるそうで憎めぬ神話の白兎　米子市　石垣花子

細腕を亡夫の影にささえられ
大木に成る日を夢に苗育ち　大阪市　中川滋雀

その時は悟りの中にいた法話
片隅の記事が明るい十二月
逆縁のいずれは会える星の冴え　兵庫県　河原みのる

憎かった猪で客呼ぶ丹波冬
来年も生きる仮定で菊の虫
八十路坂ブレーキ効かぬ谷峡し　倉敷市　藤井春日

老醜に気がついたかと鏡云い
バリュームを飲んだ結果の禁酒令
装いを捨てて悔いなき冬木立　大阪市　黒田真砂

いたわりも佗しいものと思う老い
妬心抱いて歩けば街は十二月
聖夜祝う一人の夜をもて余し　寝屋川市　柴田英壬子

感冒の菌が年々しぶとなり
恙がなく働きぬる目の風呂が好き
じっくりとことしを冷たく振り返る　鳥取県　金川満春

後一歩出来る縁談年を越し
最終の父へ見て置く風呂加減
鐘つけば亡母の笑顔が湧いて来る
岡山市　井上柳五郎

あれこれと出させて聞いて買わず去に
泣きごとの願いも混じる初詣で
宿題が漫画番組にまたずれる
米子市　増田竹馬

薄味に慣れて平和な老夫婦
腹を痛めたこれが胆石かと眺め
舞扇人間国宝と言うリズム
七尾市　松高秀峰

PTA母は小さく隅の席
省エネの手本の様な母達者
胎動へ何祈る母初詣
大阪市　西川善紫

大和の峰峰　神話のたたずまい
口ほどに体近頃用なさず
間違うているのに頑固改めず
鳥取県　川崎秋女

やがて雪抱く山肌をいとしとも
底辺へ妻の値打ちが分りかけ
泣くゆとりまだ持っていた倖よ
和泉市　西岡洛酔

天中殺と片付け歳も暮れと成り
この子等の為に生きねば父の脚
自暴自棄こんな暮しでどやが明け
岡山県　出原敬一

謹厳だった故人偲ばす冬の壺
冗談はかまっておれぬ暮れの耳
年の瀬の妻にやりたい感謝状
柳井市　弘津柳慶

山茶花の赤もわびしい独り者
仏壇へ座る時が多くなる
たった一つのエラーからリズム狂って来
呉市　林野甦光

カラフルに女が走る雪しきり
風鈴が吊りっぱなしの冬の底
キャンドルのつぶやき頬が揺れている
河内長野市　井上喜酔

若さある証拠家には落ち着かず
寄せ書の代書を頼む筆不精
笑顔にも苦労があった舞台裏
岡山市　時末一灯

鼻先の餌へ歩幅の乱れる日
五臓六腑赤信号のままの道
誰と会い誰と訣れるこの年か
松江市　恒松叮紅

孫たちが揃えば何かある無心
順調に事が運んでいる不安

芸が身を助けて無職忙がしい
倉敷市　斎藤通風

歳末になぜ雑用を多くする
殊更に回答伸ばすも策なのか
苦労人ですと社交のない男
玉野市　小谷仙山

鯛を釣る餌かも知れぬ御中元
焚火の輪土工の話しを飾らない
無病息災願って欲が無いと言う
島根県　栂みどり

つつがなく夕陽がおちる帰り道
我が余生心に刻むうた日記
故里の秋はもみぢの山びょうぶ
京都市　松川杜的

網棚から荷物が落ちた十二月
大根嫌いも大根を食べた大根焚
求人欄年令欄で皆アウト
美称市　安平次弘道

社のために言わねばならぬ首洗う
札束が意志の弱さを突いてくる
漁火が汚染の海へ泣いている
竹原市　時広一路

白波が黒い海から湧いて冬
作戦が決まりコーヒー呑み終える
神様は黙って願い聞きおかれ
東大阪市　森下愛論

定年で辞めたコップに花を挿し
梵字の墨そのまま煮えて大根焚き
手を出せば仁丹のせてくれる妻
兵庫県　藤後実男

満腹でそれから何も考えず
流れ星悩みかなえずまま孤独
アクセサリー皆んなはずせと云う手術
東大阪市　萩尾真佐志

一生の頼みにしては軽い口
アベックが朝からアクビして通り
身に余る言葉長生きしたくなり
倉吉市　渡辺菩句

消しゴムでせめて死の字を消してみる
見渡すととげある言葉の花盛り
指尖を燃やして年賀状を書き
奈良県　上田翠光

とやあらんかくやあらんと嫉いている
絢爛と公社公団無駄使い
老いさきのだん〳〵縮む年が明け
東広島市　高橋鬼焼

庭のないくらしになれて花を買う
根性の歩巾がほしい十二月
正論のはけぬ男のサングラス
大阪市　神田秀峰

長生きをするため此の世でいけずする
改札で別れのサインと振り返えり
ゴミ増えて国土も増える埋立地
東大阪市　斉藤三十四

バスツアー帰りはのど自慢
ライバルを追う視線尖ってる
PTAカラット指にひけらかし
大阪市　北勝美

暑うても寒てもやっぱり愚痴を云い
不平不平不平を云える平和さよ
あの頃を思えば中流意識する
貝塚市　行天千代

自信作落ちて作句の腰くだけ
裏切られ女が生きる涙坂
父と子の内緒ばなしは釣の事
高槻市　福田丁路

借金で見栄張る顔にあるかげり
借金を返す礼儀を君知るや
人生の裏街道にある仁義
島根県　西村早苗

ああ愉快お前ごときを敵とせず
働いた日銭で二級酒がうまい
茶柱へ夫婦でのぞく朝がある
八尾市　納糸葉

悪夢でもいい、亡夫に逢いたくて
真相を解けば疵つく人がいる
時計の速さが恐い十二月
岸和田市　島崎富志子

松の内受験の文字をかくしたい
カラオケの下手がうけてる三次会
うた、ねの肩に毛布のあた、かさ
西宮市　野呂鵜汀

何れ皆何拠へ帰る人の群れ
無愛想で味が自慢の店と云う
相槌を打ったばかりに左遷され
岡山県　直原七面山

くちなしの白き目にしむ愛の日々
逢えばまた別れがつらくなる二人
色々あるが安いのにする
鳥取県　清水一保

秒針と今日も果てなき僕の旅
振り出しに戻れる若さうらやまし
紅白に気兼の要らぬ野らの歌
出雲市　吉岡きみえ

色冴えぬ老いてさみしきベレー帽
不気味さは壁がきいてるひとり言
ひび割れてお金もうけの辛さ知る
和歌山市　松原寿子

ひたすらに慕い樹海を踏み迷う
なお慕い逢う苦しさと愛しさと

大きく小さく慕う心にある波紋
青森県　五十嵐　操史

古傷に触れぬ友情持っている
何時終るともない話題のコップ酒
大地から足が離れて農沈む
岸和田市　狭間　希久志

倒産の看板朽ちて骨を見せ
入れ智恵の策もネタ切れ又負ける
計画の罠美しい色に見え
大阪市　西出　楓楽

忙中閑まず何は置き昼寝する
地下街へ入るに惜しい澄んだ空
舗装路を土には還れぬ落葉舞う
三重県　坪田　冬花

頭だけ下げたら笑う父である
なにもかも知って老木語らない
真っ直ぐに歩けば山も川もある
和歌山市　浦野　和子

花活けて花と一つになる無心
売約済貼ってあるから欲しくなり
お茶漬の味しみ〴〵と古稀の膳
八尾市　宮西　弥生

外面のよい笑顔なり絵にならず
毛皮着る女の中身が知りたくて
ひとり寝の女の夢なら覗くまい
岸和田市　清野　こう

時間など忘れて炎えている二人
浮腰で時間気にして聞く話
暴走を悪魔の声と聞く深夜
和歌山市　西山　幸

一つ荷を減らして紐をしめなおす
追い越して行く華やかなブーツたち
もう越せぬあがきを嗤う川の音
出雲市　石倉　芙佐子

争いの後は静かな雪になる
逢えばまた流されそうな情の舟
綾瀬市　大山と金

ガメツさもほどほどにありお人好し
幸福にいる母なんでもありがたし
加賀市　細呂木　魯木

人類の願う平和は辞書にだけ
孤独が集り盛り場盛り上がり
藤井寺市　中原　比呂志

行列ができると並んでみたくなり
真夜中のコップに悔悟の愚痴溢れ
本田　恵二朗

雑念を捨てようゆっくり爪を切る
神ならぬ身です買うたら値が下り
苦労人の五臓六腑に角が無い
鐘の音へしばし忘れる欲世界

厚化粧で心の傷がかくせるか

浜田久米雄

また一人喪中につきのたよりが来
年のせい持病の数に指を折り
またしても医学辞典を引く日なり
二月の灯思案を練れば薄暗し

延永忠美句碑除幕

秋の晴れ藍綬の句碑の美しき

正本水客

人を指差す過ちを指は持つ
態とらしい拍手が湧いて時かせぐ
一説によればと逃げ道あけておく
雑兵に勇み足など認めない
何気ない仕草がだんだん遠くなる

尼緑之助

世も末と稲架は田甫で笛を吹く
もがり笛鎮守の森は聞きなれる
叱らない先生赤く病んでゆく
恰度よい病巣となるもやしっ子
教科書に他国の神話を拝ませる

伊藤茶仏

正月の顔に水割りあっけなし
新雪を踏む正月の下駄を履き
正月をちょこなんといる老二人
世の中の歪みを背負う落ちこぼれ
句碑があることが嬉しいお人好し

川村好郎

音立てて崩れる積木の老いの死よ
あっさりと辞めようホカロン　パンパース
仕方なく動く秒針と見える日も
もう何もない人と逢うにぎりずし
傘寿近しされど前向き崩すまい

若本多久志

念長寿しがみつく世にあらねども
金策に追われた頃を偲ぶ今日
十年も昔の義理でくる歳暮
香を焚き書斎にこもる安らぎよ
粒うにと焼海苔だけで老いの膳

橘高薫風

悼　大山あや子さん（三句）

玲瓏の笑みかの世にて所得ん
優しい人をなおもやさしく有馬筆
有馬今日悲し酔いざめ湯ざめして
餅焼けばふくれる人に逢いたきに

西尾栞

糸底を撫でつゝ話す去年今年
ひれ酒のだんだん声が高くなり
落ち合うはジングルベルの鳴るところ
陽のあたるプラットホーム向い側
三ヶ日ホーム炬燵の酒仙かな

秀句鑑賞

—前月号から—

阿萬萬的

秀句鑑賞の原稿をお預りして一と通り眼を通して見ると、先ず眼についたのが老境にはいられた方々の枯れた渋さの句だったのも私の齢のせいかも知れない。

自問自答きょうも減点上まわり

傍島静馬

自問自答して静かに自分の一日をふり返る余裕を持つ老境の美しさというものを感じさせてくれる。

おばあちゃんも一寸おしゃれの七五三

川端柳子

ひょっとすると七五三を本当に喜んでいるのは、おばあちゃんかも知れませんねえ。

捨て石となるよろこびを子に告げず

八木千代

八木千代さんにしてこの句、なるほどねえと心打たれる感じです。

老いてなお仄かに薫る身嗜み

福田丁路

—同人吟—

パーティなどで出来た句でしょうか、それとも舗道のゆきずりに感じた句でしょうか。何れにしても、からっとした秋空を思わせる美しい句ですねえ。

うつ向けば髪の薄さを指摘され

野呂鵜汀

さみしいですね。だが『君だって薄いじゃないか』と笑いで打ち消してやりましょうよ。

老兵の思い出ちぎれ雲に似て

藤田軒太楼

野仏をひとりにはせぬ花が咲き

河村日満

風に舞う枯葉さながら老の詩

江城修史

川柳とは皮肉や笑い一辺倒ではありませんこんな詩もあるのです。お互いに短詩として川柳を楽しみましょうね。

散る事を知らぬ造花にかびが生え

小谷仙山

人気歌手の老化を先輩だのこの道何十年のベテランなどともてはやしてはいるが陰に廻れば……かびならぬ陰口が聞かれるのでは。

負け犬でよいと悟って口つむぐ

藤村〆女

尾を巻いて来たとは云わぬUターン

石垣花子

都会のきびしさを肌で感じ、或る一種の敗北感を持ちながら、なお且つプライドを保とうとする気持、わかるような気がします。

人情の種火に逢いに帰省する

森井菁居

ふるさとはいいですねえ人情だけじゃなく山や川も、だが田舎も都市化が進んでだんだんと……そんな甘さが消えているかもねえ。

逃げ出した小鳥に稼ぐ知恵がなく

長野文庫

若者のその場限りへの慣りかも知れないが彼等も結構生きて行くものですよねえ。

許される範囲で嘘を使い分け

萩尾真佐志

許される範囲の嘘、どの程度までですかね。週刊誌の嘘、国会議員や大臣達の嘘もこの中にはいるのでしょうかねえ。

愚夫愚妻同じ時間をもて余し

高杉鬼遊

何か私の事を云われているような気がします。お忙しい鬼遊さんにはそんな時間などないと思いますがねえ。

間隔をおいて捨て犬ついて来る

大坂形水

捨て犬にだってそれなりの知恵があり、頭の中では警戒心とあまえる気持が交錯しているのでしょう。なるほど、なるほど。

三面鏡泣けば三つの顔も泣き

大原葉香

句として一寸ばかり古い感じもするが娘さんを持つ親の気持、娘さんのなげきを汲み取ってあげたい気持、わかるわかる。

反対も賛成もせず酌ぎに来る

時末一灯

男だから反対意見もあって当然、まあ一杯いこうや。

川柳太平記(33)

川柳を狂句と呼称宣言

東野大八

四世川柳・風梳庵眠亭賤丸・人見周助は、江戸八丁堀同心という顔の余徳もあずかり、その交友は戯作者、狂言師、浮世絵師、儒者と万遍なく八方に拡がっていた。

ここでこの四世川柳にとって興味深いことは、天保三年（一八三二）五十五歳の寿の祝いに「東都俳風狂句元祖」を初めて公表したことだ。彼はこの時、自らを「俳風狂句」の元祖と称した傍ら、初代柄井川柳を「初祖」にまつりあげていることだ。

このことは「川柳」の呼称が、「前句付」もしくは「川やなぎ」、「川柳風」という風に固定していなかった。人見周助は、この川柳なる短詩型を、「狂句」と呼称すべく一種の宣言を行ったものとみてよい。このことは、狂句の呼称はともかく、一応の見識のあるアイデアとして評価しておく必要がある。川柳史上、刮目すべき宣言と思われる。

この四世川柳が呼称づけた「俳風狂句」は安政初年に、五世川柳（緑亭暁斎佃）が「柳風狂句」と改称し、同時に柳多留百六十七篇をもって幕を閉じるのだが、これは後述の五世川柳の項で述べたい。

ともあれ文政八年編の多留八十三編の序に四世川柳に丸っきり頭の上らぬ文日堂礫川はつぎのような賛辞を四世川柳に奉っている。

―柄井川柳叟世を辞してよりこのかた、二代目三代目その名を継りといへども、句々を判するにいたりては、一流の滑稽幽妙を失うに似たり、たとえば盲人の象を探りて、足をなでて桶なりと言ひ、尾を曳ては箒ならんと言ひて、いかでか其真を見ることあたわず。今さちに四代目川柳なむ出て、全象始て見えたゞちに真面目を得たり。豈よろこばしからずや。はた古柳翁嘗ていへる事あり、もし百年の後ふたたび我が奥旨を知る人出でんと。まさに此川柳雅士のために言へるなるべし。あゝ川柳なる哉―

七十八歳の礫川もボケたもので、四世川柳の狂句を初代川柳の衣鉢を継ぐ宗匠と持ちあげているわけだ。この情ない文日堂礫川の点者としての在世中の手柄は、四世川柳がまだ世に出ない頃の文化四年（一八〇七）の「下女一題」という題詠を文日堂評で、世に残したことだ。この事例が今日の川柳界の定石となった「題詠」の草分けとなった。

さて、狂句に還すが、そもそも「狂句」の字句はどこから顔を出したのであろうか。それは「俳諧七部集」の〝冬の日〟（貞享元年―一六八四―）の巻頭に

―笠は長途の雨に綻び、紙衣はとまりとまりの嵐にもめたり、詫び尽したる詫人、我さえ哀れに覚えける。昔狂歌の才士、此国にたとりし事を不図思い出て申侍る

狂句　木枯の身は竹斎に似たる哉　芭蕉―

四世川柳が「誹風柳多留」五十八篇に「五題乱撰」に初めて狂句の名を登場させたのは文化八年のことだから、柳史上に狂句が出たのは百二十余年も後のことになるわけだ。

好間堂山崎美成の「海録」巻七（文政六年板）にも、狂句の濫觴は、右の芭蕉の竹斎の句をあげて、その根拠として

—隠遁者世にはなれたる竹の皮
—香り売にほふて渡る大井川

の句を示している。

文政九年四世川柳は、はじめて柳碑建設を断行している。このことは多留九十七篇に

—ここに狂句の元祖川柳叟は、寛政二のとし故人になれり。二代三代の間に俳風碑を催すといへども事ならず、今四代川柳叟の時に至りて此道の連中打寄り、向島なる木母寺の境庭に創立せり、あゝ川柳翁の末々広々なる事奇々妙々也。故にこたび諸連の惣評を乞ひ大会を催し、其集吟の勝番を桜木にものし、柳だる九十七篇と題し、余れる句々を八、九、百と四つに分けたるとじ文も末広会のいさおしというべし。

文政十亥とし冬の日　　菅子

この句碑に遺された、四世川柳の句は

—心にも上下着せん今朝の春

で、「東都俳風狂句元祖　四世川柳」と署名している。この碑は、文政九年八月二十八日に建設準備会が盛大にもたれており、碑面に礫川以下三十名の名が刻れている。川柳界の句碑建設は、この碑の建立がまずは元祖とみてよい。

この辺で四世川柳の事蹟もひとまず筆をおくことにするが、要するに四世川柳人見周助の狂句の傾向の盛況によって、初代柄井川柳の写実的俳味をおびた川柳の文芸性は、娯楽趣好のバレ句に一変し、川柳も狂句の名がとってかわり、ナゾかけ、モジリの遊戯三昧に陥り、江戸狂句はハシにも棒にもかからぬしろもので、江戸の句筵を席巻していった。

この文政期の狂句一色の底で、花屋久治郎の星運堂菅哀は、柳多留の版権を他人に譲渡し、世を去っていく。時は文政三年ごろといわれているが彼のことは既に述べた。四世川柳の句碑について多留に序文を記した菅子は、門中から花久の菅哀の号を襲名した門中の二世の名である。

川柳のルーツは、前句付の名称にはじまったが、その興りは元禄九年（一六九六）の頃の上方（泉州堺）で、それが江戸に移り初代柄井川柳を生んで全盛をきわめ、一時は「江戸句」として独自の繁栄を誇った。「誹風柳多留」は、その川柳マスコミとして斯界に君臨し、百六十七篇を世に残した。

この柳書を模倣し、数多の板行がみられたわけだ。江戸では「絵本柳多留」（享和三年）が気を吐き、絵入り雑俳本として人気を博したことから、この亜流が地元江戸から上方まで飛火したものだ。この他、江戸では「俳諧和羅飛多留」（安永四年）も出ている。しかし柳多留の独走は続いた。

このような柳書出版ブームは当然、上方、地方にも波及したことはもちろんである。多留二十八篇（寛政十一年板）には、はじめて地方連の句を載せたが、その際、山形連が初登場しているが、ここでは「田舎曲紅畠」（安永九年）や「俳風最上土産」（文化三年）がある。また信州松本では「田舎樽」（文政六年）、尾州名古屋から「さくら鯛」（文政六年）があり、上方では「浪花柳多留」が大阪から出ている。これは初篇から四篇を出し気を吐いているが、また「狂句梅柳」は評者素行堂松鱸で、天保二年から同十四年まで二十五篇を続刊している。次回はこの松鱸を中心とした関西柳界の在り様を述べてみたい。

誹風柳多留廿六篇研究（一丁）

八木敬一・鈴木　黄・石田晋一
南　得二・小野真孝・本多正範
石田成佳・大屋六郎・多田　光
故岡田　甫

◇御挨拶

誹風柳多留廿五篇研究の御愛読を有り難うございました。川柳塔社の御厚意にあまえまして、ひき続き廿六篇研究を掲載させていただく事になりました。メンバーは、八木敬一・鈴木黄を除いて、ガラリと替わります。多田光は、ベテランで本研究のコーチ格。岡田甫先生は、残念ながら去る昭和五十四年十一月に他界されました。

故岡田甫先生に師事した多くの研究家が今まさに、その成果を世に問おうとしています。本研究も、岡田先生の御指導のもとに、古川柳研究における基礎作業の一環として行なわれたものです。廿五篇に変わら

1　**せいたやつ歩てかき立て呵られる**

八木＝将棋の句であろう。負け将棋か。いらいらしている時に行灯の燈が暗くなった。あわてて持っていた「歩」で燈心を「かき立て」て、その駒の持主（である対局の相手）に叱られた、という句であろう。

南＝「せいた奴」は気忙しいやつ、相手が長考するに焦れて、持った駒歩で相手を急きたてる動作をうるさくやるので、五月蠅い、一寸待てよという光景ではないでしょうか。

小野＝状況は礎稿の如く思われるが、果して歩駒で燈心をかき立てられるものであろうか。「せいたやつ」には、おっちょこちょいの気味はないだろうか。

へぼ将棋王をなりこむせいた奴　三二・31

多田＝礎稿賛。

岡田＝将棋と思います。こういう勝負ごとに夢中になっている人は、そばの煙草盆のタドンが消えていても、気がつかずキセルをくわえる。（これは落語の世界）。歩でかき立てるような事もしでかさない。

2　**五月雨に下女のじれてる火打箱**

八木＝梅雨時で、皆、物がしめっているため火をつけようとしてもなかなかつかない。火打箱のそばで下女がいらいらしている、という句である。

南＝賛。

火打箱鍛冶屋程うつ五月雨　八六・4
五月雨に下女あつくなる火打箱　七一・21

ぬ御愛読の程、お願い申し上げる次第です。
原稿作成は、廿五篇と同様、清博美が担当します。どうぞよろしくお願い致します。

五月雨の寵へくべる口小言　武一三・12

石田＝賛。南氏の類句ピタリ。
多田＝賛。**岡田**＝賛。

3　どさ〳〵と猫の子に湯を浴せ

八木＝「猫の蚤取り」であろう。この生業に関しては『守貞漫稿』に

近属江戸にて猫の蚤とらんと呼あるきて妻子を養いし者ありけるとぞ云々

とある。

南＝賛。

どこへ〳〵と猫の子ニ湯をあびせ　二八・2

何となく男の所作と思え、組屋敷などで非番の御家人の家庭風景を想像しています。

多田＝「猫の蚤取り」のことは知っていたが「どさ〳〵」という言葉、あるいは南さん引用句の「どこへ〳〵」という言葉などから、ごく普通に見られる猫の子へのからかい、或は猫の子のちょっとしたいたずらをたしなめることをよんだものと解していた。しかし、いずれとも断じがたく岡田先生のご意見を伺いたい。他にこの商売を読んだ句があればと思う。

岡田＝八木氏の解、文献を引いて明瞭のように思えるが、多田氏の疑問もまたご尤も。「どさ〳〵」はあわただしい足音の表現でもあろうか。簡単に表現すればドタン・バタンである。ノミ取りにしても湯をあびせるにはおさえていた人が手をはなす、猫が逃げる、その瞬間にあびせるという事になろう。南氏ご引用の「どこへ〳〵と猫の子に湯をあびせ」は、まさに適切な類句である。さて、ノミ取り商売というもの、ハッキリそれを詠んだ句はない筈。疑問は残るが、やはりノミ取り業に関する句と解してよさそうに考える。

4　本尊ンの御名を其まゝ額に書キ

八木＝観世音菩薩の異名を施無畏という。浅草寺本堂、堂内正面の額には現在も「施無畏」とある。

天人は施無畏の側に寝まつてる　六七・29

ただし、現在の額はお寺の人に尋ねたところ昔の額は焼けて書き直したものだ、ということです。

鈴木＝賛。先日、八木氏と浅草寺の社務所で「せむい」について聞いたが、全然何も知っていないので、ガッカリ。

多田＝同。八木さんと違って二三種しか持っていない版本の一つに、五代目川柳の軸句のある「浅草観世音奉額会」という句集がありその中に

其形りも施無畏のやふな通夜疲レ

という句がありました。

5　源氏絵を蓮花へ書くと哀れ也

八木＝源氏絵は『広辞苑』によると、①源氏物語を題材に描いた絵の総称、②平安時代の風俗を物語風に描いた絵の総称、とある。また、源氏雲ともあって、絵の中に金箔を洲浜形に置いて、雲のように見せたもの。画面の区切りや遠近の表現に役立て、或は装飾的効果を高めるに用いる。源氏絵に多く見られるのでいう、ともある。

ここでは、源氏絵とは源氏雲を指すのであろう。お寺の本堂の室内装飾画等に蓮の花と水と雲形を描いた絵がよくある。源氏絵は元来源氏物語に添えた絵で、華かな王朝の恋物語の絵であるが、お寺などで蓮の花に源氏雲をそえて描くと「無常」の絵になる、というような意味であろう。

多田＝よくわからぬ句です。私としての決定的意見はありません。

菊沢小松園選

子の夢を詰めてサンタの鈴が鳴り
物価高成層圏で止まるだろ
天皇の瞳に拾われた野辺の花
黙ってさしだまって受ける酒もあり
ひよ子の数みな抱き終えて目をつむり

熊本市　有働芳仙

変化球投げて反応確かめる
文学に燃えた背中に子を背負い
老眼鏡足りない視野へ虫眼鏡
枯葉舞う時の流れに逆らわず
文部省推薦と言うお人柄

米子市　寺沢みど里

不細工には死なずにおこう夫婦雛
子の凧も素直で貧しさには触れぬ
消しゴムで消せる夫婦の食い違い
妻を温める座布団になってやり
小卒の父の天守で崩れない

京都市　山本桐下

母子家庭こころにしかと鍵をかけ
母が抱き父が手をひき七五三
市場にも風呂にも近い家が空き
食べ放題の焼肉へ箸忙しい

名古屋市　鈴木可香

ジーパンの背中性別はかり兼ね
出雲弁築地の松に育くまれ
袋小路と知らず選んだ道を行く
旅終えて川ゆったりと海に和し

米子市　桑原伊都

物言えば金の出て行く年の暮れ
忠も消えどうやら孝も消える国
玄関の威勢はパパのボーナス日

大阪市　野田君枝

ぬるい湯の中で倖せ考える
おでん鍋ことこと愚痴を聞いてくれ
三人の知恵で結論まだ見えず

鳥取市　森田熊生

盃を持たすとかたちになる男

大阪市　白石潔

大きい夢年々小さくなって消え　大阪市　小谷清女
山茶花の散り敷く社の初詣で
祖母の背流せば歴史語り出す　島根県　松本文子
乗降口押して押されて十二月
計算の高い女で寒々し
茜雲法話の浄土かも知れぬ　大和高田市　岸本豊平次
喝采もなく色あせた舞扇
美しい嘘に一生かけてみる
下一桁まで気になる暮し向き　八尾市　高杉千歩
太陽に近いところへ襁褓干す
演歌では女は耐えてついて行く
袖すり合ういで湯の旅がドラマめく　今治市　渡辺南奉
某月某日食卓のまるい罠
いい姑になれる自信で鈴を振る
エプロンが似合って妻の小さい幸　唐津市　山下勝一
あげ底の乳房一人の夜が長い
玉ねぎの涙のせいにして早寝
下積みをやっと抜けたら肩叩き　唐津市　浜本久仁於
またくると気軽に別れそれっきり
押しのけてゆかねば俺が負けとなる
子に賭ける母の跣は美しい　唐津市　浜本義美
雑草と見れば仇敵の様に抜き
船長が今日は非番の子供連れ
頑張ろう師走のゴール見えて来た　唐津市　仁部四郎
気に入りの隙につけ入る使いこみ
庭園師わが風格を造り出し
三枝の礼つくされ鳩舎を掃除する　大阪市　鍛原千里
ペルシャ猫何が不足で家を出た
結果論シェークスピアの言う通り
泣きたい時泣かせてくれる胸がある　尼崎市　中辻千子
マニキュアを塗った時からうそが見え
才女の涙人形だけは知っている
歳か怠けか炊事嫌やだと思う日も　大阪市　内藤ますえ
過去5年これから5年は差が違い
無事で暮らせるあなたの背なを拝む朝
言い切ってから頼もしい顔になり　熊本市　北川一進
コンピューター我が社の秘密みな覚え
大正が叱り明治が弁護する
性格も折り目正しい字が証拠

夜食だけそっと置いてくテスト前
半片に思い出秘めて周遊券

島根県　福間芳枝

待ちぼうけ飼ってる虫の顔になり
見切品ちゃちな女がゆさぶられ
子ども部屋カーテンするから疑われ

神戸市　久保禎三

盥回し歳暮の名残セロテープ
看護婦のお産は医師も譲り合い
朝火事の道路にならぶ灘の酒

兵庫県　野々口ゆう也

もらい手が無いから着なはれ一張羅
冷戦も解けたか箸が喋り出す
わしも来る霊園楽しと見て廻り

島根県　岩田三和

光さす方へとにかく歩く虫
目の前にぶらつく髪を切り捨てず
考古学いたずら書きを真に受ける

兵庫県　中田白李

一里塚古稀の楢山見えてくる
まん中の臍が私を曲げさせる
流しあう銭湯借金にはふれず

鳥取県　武田照子

行く先を野良犬先に嗅いで待つ
喧嘩でも売る様に来た暮のつけ
神様もセールスマンの顔で来る

姫始めなどと楽しいお正月

大阪市　堀口欣一

正月の野良犬遊ぶ新開地
元旦の新聞にある心中記事
敵へ廻った駒が王手と攻めて来る
二次会があるから堪えて待つ末座
もう半分まだ半分が酌み交し

羽曳野市　麻野幽玄

口ずさむ歌に世代の息がある

大阪市　林ひろ子

高野山ジングルベルの無いところ
矛盾へは腹立つ性分損ばかり
間引菜を取りに来いよという電話

新宮市　辻はじむ

父逝って酒屋のつけがもう来ない
目的がなければ犬も尾は振らぬ
花ひらくようにお化粧できあがり

倉敷市　大森登竜

お化粧を忘れた寡婦の長い靴
検査中河豚を喰ってる腹工合
走馬灯ああ大詔奉戴日

大阪市　藤森小雅子

二次会の足が割れてる戎橋
皮下脂肪いつしか中年意識する
風船をふくらす要領だってある

倉吉市　今村夕路

いつまでも八方美人で通されぬ
ポストまで決めた返事にまだ迷う
和歌山県　天満三千代

激流の底で大河に出るあせり
戦友を歌う老兵若がえり
泣いた日が今の足場になっている
西宮市　妹尾春江

祝盃にひとりうつろな手があぶる
老いの愚痴はずかしい程生きてます
齢と同じ石段登り紅葉寺
尼崎市　中谷利美

想像にお任せします家事都合
この洒落がわかる女の猫かぶり
総入歯外したそれがデスマスク
橿原市　西本保夫

嘱託のベースダウンを妻知らず
嘱託としての智識はゆずられず
嘱託の言いたい事をまた押さえ
名古屋市　越村枯梢

楢山を越えれば極楽だと信じ
遠くなる故郷それでも墓がある
終バスに遅れ尾灯に笑われる
豊中市　満仲きく子

それなりのわたしが写る三面鏡
積木まで今のわたしに逆らって
食べている時の幸せそうな顔
高槻市　竹内花代子

絵に書いて見たい水車のまわる茶屋
不自由な言葉を女妻と云う
二上りのとこで踊の手がかわり
松原市　本多洋子

ちんどんも素顔にかえる裏通り
逢うごとに手の温もりを残す人
仲のよき鶏の埴輪にならいたし
山口県　高崎喜一

並び寝る子の顔どれにもある未来
来客の持ち物見つめる子の瞳
笑わない客に漫才師はあわて
鳥取市　中森葉士人

落ちる葉は生れた樹など振り向かず
灰皿に師走長めにねじり捨て
相談をすると叔父から笑みが消え
旭川市　朝倉大柏

捨てて出る故郷あまりに美しい
電卓でしても家計簿赤は赤
とっときの平手父権というひびき
岐阜市　市川鱗魚

爪染めて実家の敷居高くする
旗巻かぬ未練仮装にまだ倦かぬ
齢は薬結論からの無理がない
八尾市　堀内柳柚

道草をしながら責任考える

河内野を嫌った凧は糸を切り
追われてる男消ゴム捨て切れず
岡山県　串田句昧地

風向きに背かぬ蓑虫見つめられ
廃品になりたくもなし鍬を振る
生き延びた頬の皺妻と見つめ合い
高知県　山下登舟

親切な傘に遠慮の肩がぬれ
現実になってローンが身にこたえ
堺市　田辺哲寿

お返しであの人の義理消しておく
世の中の嘘が分って夢細り
京都市　松川芳子

愚痴一杯溜めて老後を病んでいる
杉苔が枯葉を抱いているゆとり
新潟県　高野不二

話相手もなくて盃ハイピッチ
七人の敵へ味方に出来ぬ妻
唐津市　桑原掬治

老妻は自動ドアーの閉る距離
郵便船島の舟虫乗せている
唐津市　木塚素石

学生は勝って祝盃負けて酒
まゆつばのいいわけもある年の暮
唐津市　田中紫浪

足組んだ女の素性考える

馬鹿になれ馬鹿にとほんまの馬鹿言わず
唐津市　田口虹汀

レモン風呂外は霰になったよう
平凡な年と笑うて賀状かく
東予市　小山悠泉

都会の灯甘くなかったUターン
定年へ暮しの枠を組み直し
大阪市　西村芙佐女

夫とはつきない夢をみたおとこ
立ち止り昨日を鏡に問うてみる
米子市　政岡日枝子

ランデヴー星の光の中を行く
あれている心を鏡に知らされる
島根県　岩佐富子

あきらめの心に想う星の冴え
七十でまだ役にたつ糸切り歯
米子市　雑賀美世

胎動へころころはずむ毛糸玉
北国の春待つ鍋に民話聞く
大阪市　橋元美恵

川の字の真中猫が寝ています
父帰宅　強風波浪を母合図
米子市　菅井未知

フラッシュにスター気取りで長尾鶏
ライバルの笑顔の奥に策がある
長崎県　岩崎和子

人間の欲目すかして物を視る
曇後ち晴れて銀婚らしき旅
羽島市　伊藤静枝

うたた寝のパパへ末子が布団かけ
バーゲンのズックにサイズ間に合わず
大阪市　横山静子

日なたぼこ日に日に老いの仲間入り
ひよこまで主役の春を待っている
兵庫県　奥野テル

同感のそぶりで意見別に持ち
落葉たく広場は老いの憩いの場
青森県　波　ただお

運命に泣き泣き「むつ」は老いて行く
風船に怒りを詰めて爆発し
尾鷲市　渡辺伊津志

気負わずに構えずにある実力者
下手な字が良い大安売りのビラ
高知県　赤川菊野

伝統を守る老舗の五ッ玉
再婚の迷い鏡にのぞかれる
鳥取県　羽津川公乃

してやった笑顔に醜い影が射す
七福神紅一点が気をもませ
八戸市　島田昭治

まだ苦労足りぬか若く見てくれる
底辺に生きてそれなりの泣き笑い
米子市　青戸美佐

老醜に気付く鏡をそっと閉じ
団体が去って静まる奥出雲
米子市　田中亜弥

小心な割に大きな下駄の音
団体の頭数にと狩り出され
今治市　新居田胡頽子

エリートの誇りを纏う菜っ葉服
底冷えがします師走の物価高
熊本市　成瀬月仙

義足かなしズボンの折目消えぬ日日
プレゼントしたりされたり恋たのし
兵庫県　森脇和子

虫かごにすぎな残して孫は去る
よせ鍋へ二人の箸がゆずり合い
大阪市　松尾茂子

坂道が都会育ちへ笑いかけ
キューピーの両手無心に生きつづけ
江津市　杖田よし昭

ローカル廃止河は変らず流れ行く
単身赴任ローカル車窓の野や山や
浜田市　佐々木裕

若く着て欲しい母への柄合わせ
独り居が話相手に目貼りする
米子市　野坂なみ

鍋料理松茸一本欲しい湯気

蜜吸って護身の毒矢つがえてる　今治市　矢野佳雲

Uターン都会へ牙は置いて来る　大野武太

お土産に押した日付けが早過ぎる　大阪市　大工静子

相性がよいのか女性にもてる寺　泉佐野市　八塚三五島

はみだして妻と場末の日銭おう　今治市　稲葉好子

サジ一本持たせ乳母車と話す　寝屋川市　高知県　松岡三吉

般若心経五枚目も又一字ぬけ　青森県　岩淵一星

講習会　東京都心でかん詰めで　岡山市　原田凡九郎

素人の上手器用としかいわず　東大阪市　三宅哲夫

孫の声受話器の奥に笑ってる

夫の命ローンと共に去る

停年に台本のない早い朝

値切ること知らないパパのお買物

老夫婦他人の頃のように寝る

耐えているようには見えぬ厚化粧

初詣で愚痴は言わないことに決め

ご無沙汰はおたがいさまの年賀状

さわがしいことよと目覚むムツゴロウ　弘前市　田中叶

文明の世にも絶えない人柱　岡山県　松本元江

静電気夜のつとめの服脱けば　大阪市　杉本智慧子

親と子の心がどこかですれ違う　寝屋川市　立床晴風

鍋料理冷えた心も満ちてくる　島根県　東原福子

倒産のカヅノコ去年が生きていた　島根県　星野侑正

商魂に主婦の財布が操られ　島根県　山根峰雪

北風へ病軀は自然に身がまえる　大阪市　平井露芳

わら衣着せて牡丹の冬仕度　大阪市　岡田ふみ

年賀状一枚助かる喪のハガキ　鳥取県　和井観洋

月末は母の財布を当てにする　鳥取県　加藤茶人

私ならきっとこうする結果論　鳥取市　武田帆雀

大みそか集金人の泣きを聞く

又人を信じた貝が蓋を開け

秀句鑑賞

—水煙抄—

—前月号から—

小林　由多香

廻り道こんな綺麗な花に遇い

矢野　佳雲

今までにもよく詠まれた着想ではあるが、見過すことのできない句である。きれいな花は案外人の目の届かないところで咲いているかも知れない。「こんな」がよく効いている。人生にも言えることである。

保護色に染めて女に隙がない

鍛原　千里

保護色は外敵から身をまもるためのもので、弱い立場の女が身をまもるための手段である。「隙がない」で結んで成功した。

こまくるりくるり子どもの日にもどる

森田　熊生

「くるりくるり」を重ねてこの句を味わい深いものにしている。作者の川柳に対する取り組みがうかがえる。

夫婦して悩む倖せだってある

加藤　茶人

悩む倖せそれも夫婦でである。作者のとらえた貴重な人生の体験。下五の言い切ったところに妙味がある。

秋祭すんで明日からもとの過疎

藤森小雅子

明日からとしたところにこの句のよさがある。今日からでは切実さがない。また「もとの過疎」が一層わびしさを感じさせる。

有名税請求あれば払いたい

仁部　四郎

有名でないから請求もない。それだけの収入もない。税金が払えるほど収入があり有名になりたいものであるが無理かな。

だましだまし今日までは来たポンコツ車

白石　潔

さて明日からはどうなるのかな、癖を知りつくして今日まではうまく操縦して来たもの、もうだましが効かなくなってしまった。大修理か買替えか。

鼻先へ蠅の余命がうるさくて

松川　芳子

余命がうるさいとした表現は巧みであり、この句の命。また上五「鼻先へ」がこの句を一層たのしくしている。

双方の合わぬ定規を当てたがる

松本　文子

わざわざ合わないものをと思うが、合わないものを合わそうとするおもしろさがある。下五「当てたがる」で成功。

読みさしの本も枢へ入れてやり

有働　芳仙

ジーンと来る作品。読みさしの本へ、に熱いものがこみあげてくる。さらにそれを枢に入れてやる心づかいに胸をうたれる。作品に現実感が盛り上がっている。

反発も夕食までの二階の子

朝倉　大柏

何事にも反発してみたい年頃、また二階へ上がったままである。でも夕食の時間になればきまって降りて来る。母さんにはよくわかっている。親子のあたたかい愛情。

紅一点居ればルールはよく守る

久保　禎三

男ってこんなものかな……。女性の前ではいいかっこ見せたくて。男の心理をついた着想のすぐれた作品。

ひと息に飲み干す酒が味方です

伊沢　午郎

酒が味方をしてくれる。それもひと息に飲む酒である。たくらみのない素直な作品であるがおもしろい。

信心をするのに金が要るふしぎ

中谷　利美

ぴったりと当った予報の雨歩く

中森葉士人

受話機の向うに次元の違う笑いあり

西村美佐女

捨石にするには個性が強すぎて

和井　観洋

書くまでが楽しい白い雑記帳

満仲きく子

以上の句それぞれ共感を覚えた作品。

路郎賞 川柳塔賞 候補作品中間発表

自 55年9月号
至 55年12月号

◇路郎賞候補作品

（到着順）

正本水客

浴衣きて舞台のような下駄の音　高橋千万子
飲めぬからコップ一杯注いで置く　若柳　潮花
それほどのことでもないに四面楚歌　工藤　甲吉
海の水掬ってもすくっても無色　錦織　文子
どうしようもなくてぶらりと父の墓　本多　清人
石地蔵雨に目ざめた顔で佇ち　大原　葉香
水引草小さな赤を主張する　山口　美穂
名月へ大和は寺の屋根ばかり　阿萬　萬的
ねぎらざむ幸せそうな遠い灯で　岩田　美代
火をつけて灰皿のないのに気付き　萩尾真佐志
雨降りを手でたしかめて落ちつかず　間嶋青丹子
病人に喋らせ話題のない見舞　市場没食子

川村好郎

明日を履く靴を揃えて脱きました　水粉　千翁
飲めぬからコップ一杯注いでおく　若柳　潮花
切れかけた糸つながった結び玉　神夏磯道子
ゴルフバッグまだ玄関に亡夫を置く　八木　千代
けんめいに咲く紫陽花と見てくれず　堀江　芳子
何くわぬ貌で止っていた時計　山内　静水
国のためせめて煙草はやめません　高杉　鬼遊
風情なくボタン一つで開く傘　桑田　静子
私にもどる机に戻る雨の午後　高橋　夕花
子が走る孫が走れば犠打でよし　野呂　右近

菊沢小松園

明日を履く靴を揃えて脱きました　水粉　千翁
いつからか半歩先行く妻となる　野田素身郎
借衣裳脱げば自前の汗が出る　西森　花村
ちり紙にされぬ努力を忘れまい　不二田三天
借りものの策で二の矢が放てない　林　露杖
ひとには見せられぬ独楽のとまるとき　都倉　求芽
出陣の女は昼の風呂へゆく　高杉　鬼遊
頂上に立てば翼が生えてくる　小島　蘭幸
真心は訛を越えてよく通じ　島居　白宗
峠の灯歩けば歩く程逃げる　林　瑞枝

若本多久志

真白い筆に驕りを試される　中川　滋雀
一隅を照らす灯それでよし　村田　瓢太
貧乏と思う心が貧しくて　金井　文秋
ある時は横になりたい日の達磨　清野　こう
肩抱いて満つれば欠くることを説き　水粉　千翁
にくい程黒地の似合う未亡人　高橋千万子
目を閉じて悲しいことは消してゆく　月原　宵明
ひとときを温めてみても夢は夢　堀江　芳子
女の血さわぐ日もあり髪を梳く　黒田　真砂
浮世絵の指にきれいな嘘をみる　藤村　〆女
葱きざむリズムへ妻の老いを聴く　小林孤呂二
母の名は釈尼妙寂はるかなり　高杉　鬼遊
永遠の中の瞬時を這い廻り　小砂　白汀
赤ちゃんの満腹にっこりした答え　川端　柳子
告白のうなじは白い萩に似て　浦野　和子

胃袋だけ満してひとり箸を置く　八木　千代

西尾　栞

実れない運命を知るカイワリ菜　津守　柳伸
何くわぬ貌で止っていた時計　山内　静水
有るようで無いようである序列　小砂　白汀
整形の顔に易者気付かない　傍島　静馬
聞き馴れぬ訛に犬が起きあがる　遠山　可住
姉妹も五十坂から気が揃い　北野　久子
おばはんと家内と妻に使い分け　中川　滋雀
上役と打ちだしてから棋力落ち　野田素身郎
虚しさの数れんこんは穴を抱き　高杉　鬼遊
敬老の日もパチンコは勝たせない　小島　蘭幸
頑固者死ねば遺族の語り草　西川　善紫
これやこの初老の味や鮎の腸　三宅　不朽

橘高　薫風

道楽の極み釣人濡れにぬれ　高橋千万子
栄枯盛衰築山だけは残るなり　鈴木村颯子
唐招提寺ああさかんなる落日よ　阿萬　萬的
お茶一ぷく飲めばなんでもない話　本間満津子
三面鏡のひとりに妥協ぐせがある　河野　君子
リンチにも似て山肌が削られる　時末　一灯
三途の河を抜き手を切って渡ったろ　柳楽　鶴丸
白雲悠々私は点滴うってます　天正　千楠
恐いママ此処にもおったおまごと　大道美乙女

上役と打ちだしてから棋力落ち　野田素身郎

◇川柳塔賞候補作品

黒川　紫香

公園の家鴨ひねもす羽づくろい　白石　潔
玄関を出れば自分も敵になる　高崎　喜一
帰る家あるから旅が面白い　渡辺　南奉
飲み足らぬ奴がせっせと酌ぎ回り　中谷　利美
頼みごとあって椅子にも浅くかけ　園山多賀子
待たされた事にはふれず電話切る　森田　熊生
変り身の鈍い夫でついていく　朝倉　大柏
螳螂よお前も虚勢張っている　越村　枯楠
眼鏡拭く少し素直になりたくて　村上田鶴子
思惑がチラチラ見えて手が出せず　東原　福子

香川　酔々

街角でバッタリ過去は生きている　光井　みほ
取得など何にもないが側に居る　橋元　美恵
家鴨にも派閥ありそな列が出来　白石　潔
噴水をのら犬水としてなめる　森田　熊生
掘ったのがわくわく見てる陥し穴　矢野　佳雲
船長が下駄履きでくる荒天続き　浜本久仁於
塩の味最後に知って金魚死に　平井　露芳
心臓移植その後音沙汰なかりけり　堀口　欣一
誇りにも荷物にもなる第九条　岸本豊平次
釣り銭のしわに鱗のおまけ付き　立床　晴風

高杉　鬼遊

雨蛙その場その場の色で死ぬ　矢野　佳雲
夫婦茶碗なぜ大きさに差をつける　高野　不二
妻はもう俺をまたいで平気なり　有働　芳仙
欺されて欺して今日も陽が沈む　高杉　千歩
向日葵が東をむいたままで暮れ　角　耕草
優しさに又騙された姫達磨　鍛原　千里
犬さえも欲得ずくでワンという　吐田　公一
倖せな茶碗は倖せな音で割れ　辻　はじむ
海青く死ぬ気の二人とも知らず　森田　熊生
店頭で威張った鯛が売れ残り　雑賀　美世

谷垣　史好

百姓が着流しで来る喜雨休み　角　耕草
掘ったのがわくわく見てる陥し穴　矢野　佳雲
塩の味最後に知って金魚死に　平井　露芳
生活をかけた橋なら渡らねば　山根　里香
秋幾度重ねてもなお実にならず　西村芙佐女
犬さえも欲得ずくでワンという　吐田　公一
それぞれの欲が握手をして別れ　渡辺伊津志
言葉ほど冷たい風はないと知り　朝倉　大柏
滝壺へ落ちる水にも上手下手　渡辺　南奉
青春が恋し両手のありしとき　成瀬　月仙

病中柳感百度の記

―金子兜太「俳童山話」に寄せて

東野大八

さる七月上旬、NHKの女性手帖に金子兜太氏が「俳童山話」と題する俳談を行った。毎回三十分で五日間だから延べ二時間半の長講である。入院手術後、自宅療養中であった私は、格好の暇つぶしと、メモ帖用意でじっくり拝聴した。

兜太氏は「海程」を主宰し、現代俳句の教祖的存在であることは周知の通りである。その兜太氏が俳談縦横の中で、二十数句の自作を掲げ、丹念綿密な自句自解を試みた点が、私にとっては視聴上、またとない収獲であった。エネルギッシュで論旨明快、花鳥諷詠の切字の世界に耽溺する伝統的俳句に真向から挑戦し、歳事記は最早近代俳句にとっては単なる参考文献に過ぎないといった論断ぶりは私に限りなき一種の爽快さを抱かせた。

もっとも彼の論鋒をどこかたじたじの態で受けてたつ男女二人のアナウンサーは、しばしば大きな戸迷いと疑点の面持ちは隠せないが、そのしめくくりに、兜太夫人の皆子さんの句を、とどめの意味でとりあげていたのが印象的であった。すなわち

雑木林ひとつてのひら天邪鬼　皆子

メモ帖を中心に、この「俳童山話」記を詳しく再録して、彼の抱く造型俳句の体質を浮き彫りにすれば興味深いが、この試みは他日に譲るとして、私は彼の論旨の中から前衛的現代川柳との関連部面とみる、印象に残るもの二、三を挙げて参考に供しよう。

この俳談の場における彼の、兜太作品なるものの本質は次のようなものだ。

「花鳥諷詠でなく、自分の肌とこころに感じたナマの感覚対象を捉え、認識して作品すること。季節より物象感をこの場合最優先していかなければならない。たとえば

①雪の山畑白まったいらしかし斜め　兜太

②銀行員朝から蛍光す烏賊のごとく　〃

の句の場合は、①の「白まったいら」や②の句の「蛍光す」などは、今の俳句ではいわぬ―なぜいわないのか、この言えぬ、言わぬというところに私は挑戦しつつあるのだ」

「歳事記は、俳諧の季語の成り立ち、即ち芭蕉・蕪村等の先人の、室町以降の伝統の歴史的言葉の記録であって、その古人たちの知識と体験を伝承させる文献とみている。随って私にとっては単なる参考文献に過ぎない。これにこだわると、私のいうナマの、五体で体当りした詩感が失われることになる。随って私の作品にとっては歳事記とは無縁だ」

「現代には現代の体験からする感じ方と言葉がある。「軽味」で苦労した芭蕉は、そのことを句に捉えることで四苦八苦していた。私は息をするたびに出る句に、その「軽味」が潜在すると考えている。

日の暮れの背中寂しきもみじ哉

この古句などはその軽味だね。何よりもこの背中には生活の実感がある」

まだ挙げればキリがないので割愛するが、彼は現代川柳の本質まで理解してはいない。兜太作品といえば感覚の意外性というか、

無限性というか、そういったものが伝統俳句系の人々に抵抗を与えている。そういう人たちには、からくりか、トリックに溢れた扱いかねる超難解句として映るだろうが、反面進歩的かつ現代感覚をマスターしていると自負している人たちには、そういう点が堪らないのである。この点に、兜太の教祖的な魅惑がある。兜太作品に数多のその信徒たちが無条件に畏服する要素は、こうした一見難解性にこそ、神秘性を感得するもののようだ。川柳でいえば、この教祖的霊感に相当するのが時実新子女史である。いわゆる新子教のいわば霊験に相通ずるものがあると私考する。

今日の短詩型の世界では、もはや芭蕉以後の一対一の師弟の一体感は成立しない時代になっている。師に一切を殉じるところにわれがある—といった師弟型の極端なケースは、もはや成りたたない時代になっている。それに代って存在化したのが、近代意識的な教祖感覚かもしれぬ。

いずれにしろ、この教祖中心のグループ化の形成化には、時点の一つの壁として屹立しているのが難解性の問題である。俳句にしろ川柳にしろ、短歌もふくめて、こうした短詩型の生命は「これらの作品の意味がわからなければ意味がない」という伝達性の問題が、かつての時代—今もかな—圧倒的に支配した。「名句とは口誦されるものをいう」という川柳の場合の口説がそれである。

まだこうした難解性の問題が表面化しない頃の昭和十四年の「俳句研究」(八月号)に、〝新らしい俳句の課題〟とする座談会で篠原梵氏がこう発言している。(要記)

「句が解らないという人は一つは年寄の人です。だから僕と同年輩或いは僕より若い人はみな解るのです。一つは田舎の人、生活が都会人とはちがうし、句を作る原因となる刺激が田舎と都会では丸っきりちがう。それから丸っきり第三者の人(中略)さらに大事な点は、潜越ながら教養の差—これです」

要するに短詩型をめぐる難解性の問題は、(衆)をたのんだ伝達性の要求が(面)を構成した。このため難解派は極度に前衛化し孤立化し、その集団はやがて教祖中心の信徒化に赴く形態をとった—といえる。かくて、私にいわせれば「生活体験と教養の差」が、ますます難解性を切株のように固定化していった。ロダンの言葉ではないが「芸術のうえでは、一流派にとって真実であることも、他の流派にとっては迷妄にすぎない」のである。

俳句は現時点では俳誌約七二〇種、俳句人口五百万と称されている。この過熱した〝俳句宗〟は、あらゆるマスコミが寧日なく、俳句を煽り立てることに起因する。兜太宗の出現も当然の成り行きである。われら全日本人の宗教の大宗は仏教だが、この仏教にも十三宗五十八派ある。このおびただしい宗団の対象は一人の釈迦の教理に他ならぬ。然しこの樹下石上、一衣一鉢の個の世界にも、極左派の集団が幾つか介在する。これが人間の宿命、因縁と申すもので、たかが俳句、川柳にも、別派の集団が生れても不思議ではないのである。しかもわが宇宙世界は、日進月歩して、今日只今からの未来は、永劫可能性の天地が全宇宙において照り輝いているのだ。

ベストセラーの俳句歳事記に支えられた伝統俳句が、今に現代川柳の天地に一変する可能性も頭から否定はできないはずである。いわんや壺中の酒のごとき川柳界においておや。

兜太氏の「俳童山話」から文字通りとんだ一大空論にまで筆が拡大飛躍したが、とにかく短詩型の片隅に身をおくわれわれである。何事も学び教えられていかねば進歩はない。「学びつつ老いぬ」この言葉もまたよきではないか。

(五五年七・一〇病床にて)

愛染帖

橘高薫風選

氷山が浮くと男の海になる　尼崎市　黒川紫香
新聞が一番怖いことを書く　兵庫県　遠山可住
コンパスで画けば太陽にはならず
大勢の風がしゃべって行く砂丘　青森市　工藤甲吉
「わいせつ」で永井荷風を悲しませ
オーロラのような女を街で見た　和歌山市　西山幸
くちずさむアダモ独りの雪が降る
目を伏せる美しすぎる絵の前で　高知市　赤川菊野
種を蒔く人の情けをまく様に
写経する一時だけのやすらぎよ　倉敷市　水粉千翁
素うどんの音のしみこむときひとり
両輪のひびきの中に夫婦住み　米子市　小西雄々
スイッチで燈明つけて慈悲を乞う
冬眠へ地上の争い知らぬ蛇　浜田市　佐々木裕
冬の雨夫婦のボタン掛け違い
毛糸編む妻初恋を告白し　米子市　佐伯越子
子守唄忘れた女と水子像
上流も知らず日暮れに鍬をふる　兵庫県　辻文平
罪一つ消す山門の月明り
セーターを一寸赤くし満足す　島根県　小砂白汀
安萬侶の墓より日記つけはじめ
さっそうとショルダーバッグ長身で　大阪市　西森花村
防衛論毒ガス島をフト思い
自然増予算役人白アリも　鳥取市　河村日満
むかしから無口はなれてひとり酌む
ぜいたくもよしクリスマス・イブくらい　和歌山市　浦野和子
野ぶどうの実の小さな愛を手のひらに
別れ際のきれいな魔法に縛られる　宝塚市　吉田笑女
落伍者になりたくはない靴みがく
全身を預けて頼れる木がほしい　倉吉市　奥谷弘朗
碑に元気を出せと叱られそう
晩鐘が樹にしみ渡る大山寺　米子市　八木千代
くぐり抜けた闇がまた来て通せんぼ
ひといろの残る枯野の深さかな　今治市　八塚三五島
心しみじみ参道の真中を歩く
ジョギング一人満天の星と　青森県　五十嵐操史
独身をささえて呉れた預金減る
反撥を予期していない眼と思う　倉敷市　藤井春日
地位名誉金力外道へ落ちて行く
課長さんイメージチェンジしたらどう　大阪市　大野武太
予約日がくると歯痛やんでいた
戦中もギター弾いてたあかんたれ　今治市　矢野佳雲
ばかだなあなどと夫も嬉しそう
運がないなどと自分で言えますか　岡山県　岩道博友
微笑が違う自画像若かった
意識して拾う仕草に女艶　守口市　羽原静歩
牛どんの味よしみじみ生きている
平凡に平凡に朝の定期券　和歌山市　福本英子
公孫樹の葉一枚迷いから醒める　山口県　高崎喜一
結婚の祝儀土俵で負けてやり　町田市　竹内紫錆
ビル高く将棋の強い階もあり　松江市　舟木与根一
神集りし日の宍道湖霧が込み　大阪市　小出智子
もう母は何処にもいない枯野原　八尾市　高橋夕花

花いくたび傷いくたびの胸の中　高知市　西川富恵
石じっと握ればしゃべりそうにする　大阪市　河野君子
種をまく遠い飢えの日のために　大阪市　川口弘生
五十路では何処かでどかっと齢を取り　熊本県　成瀬月仙
母上と書いた折目のないお紙幣　青森県　岩淵一星
酒飲める子となり父に味方する　島根県　角耕草
葱抜いて来てたいへんな霜と言う　寝屋川市　柴田英壬子
逆縁の愛がうっすら霧の中　米子市　石垣花子
信じてもおらぬ神話で喰うて行け　兵庫県　中田白李
真冬の花火は凍って星になる　和歌山市　松原寿子
女人高野風の痛さは恋う絆　鳥取市　中森葉士人
影武者で終る名刺は刷ってない　倉敷市　小幡里風
妻と子が愛の傾斜へ見え隠れ　松山市　谷心府
雲走る高層ビルを傾けて　岡山市　川端柳子
シクラメン赤いドレスの子と競い　八尾市　飯田悦郎

婦人像蛇と小鳥の目が光り　尾鷲市　渡辺伊津志
狂咲き見てる私も人恋し　堺市　伏見茂見
補聴器は不用相手も聾なり　笠岡市　木山遠二
菜園が大地の愛を喋り出す　兵庫県　野々口ゆう也
ボケさせぬためにもたまに親不孝　大阪市　朝倉利義
いずれ年とるぞと親父子へ当り　出雲市　板垣夢酔
根掘り葉掘り聞いて自分をいわぬ女　出雲市　高見鐘堂
冬のめがねの度も狂う計の知らせ　京都市　山本桐下
初午に新春の心が残る酒　藤井寺市　児島与呂志
知った振りした一言がまた外れ　島根県　堀江芳子
浪花節へ軽い鼾をたてはじめ　島根県　堀江正朗
逆うてさかろうて子は父になる　海南市　牛尾緑楼
借金を庶民のせいにする政府　唐津市　浜本義美
ロマンもう枯れてお伽の昼の月　和歌山市　内芝としよ
初暦春の行事にうれしい朱　米子市　野坂なみ

足なえの老母駒下駄を大切に　米子市　青戸美佐
姉妹三人寄って老後の話など　大阪市　杉本智慧子
さびしさや熱燗更に熱くして　島根県　木村はじめ
お互いの過去をまさぐる酒の色　島根県　大野酔夢
日参で射止めた嫁が別居する　唐津市　田口虹汀
合槌を待ってたように次の無理　京都市　都倉求芽
悪い方へ中途半ぱはこけて行く　堺市　高橋千万子
鉄の鋲も打てずにすぎる人生か　和歌山市　堀端三男
八つざきの紙片恋のにおいさせ　島根県　福間芳枝
別れても愛したことに嘘はなし　美面市　出口セツ子
人間の憔悴がない告白で　富田林市　岩田美代
何もかも老いさらばえて児に還り　大阪市　吐田公一
限りある時間を静かに過す老い　岸和田市　古野ひで
いのこ餅たべてわが家を取戻す　鳥取県　鈴木村諷子
正座して今年へ誓う初春の床　東予市　小山悠泉
女ひとり喫茶と煙草静か去り　岡山市　井上柳五郎

米子市　桑原伊都

知恵袋姑小きざみに開けて出し

岡山県　嘉数千代香

邪心もう捨てよと梅の花匂う

西宮市　野呂鵜汀

失業へ野良犬迄もつきまとい

倉敷市　田垣方大

世を拗ねた蓑虫壁にぶらさがり

貝塚市　行天千代

雑草のねばり強さに血がにじむ

和泉市　岡井やすお

建国日橿原の空鳩が舞う

東大阪市　竹中綾珠

北風に椿の花が地を飾る

室戸市　岬風子

冬咲きのタンポポ何故か凛々しくて

東大阪市　市場没食子

性悪なケモノの一つ暴走族

唐津市　木塚素石

すがすがしがんばりますの童顔は

鳥取県　清水一保

化粧した男にお灸など効かぬ

唐津市　桑原掬治

暴落の蜜柑それでも山で星

鳥取市　武田帆雀

スチームの部屋でノルマの設計図

島根県　榊原秀子

いい子感足袋履き替えて逢いにゆく

京都市　山本規不風

島中が縁者で結婚式ひとつ

米子市　菅井未知

読み返す漱石若い血が戻り

岸和田市　原さよ子

時間割持たぬ先生人気あり

西宮市　妹尾春江

もの言わぬ半日しきりに落葉する

富田林市　中村優

西陣の帯きゅうくつな令夫人

岡山市　清水金太郎

死ぬ時が定年なりや自営業

寝屋川市　江口度

西高東低酢牡蠣の味もひきしまる

高槻市　若柳潮花

道修町昔ながらと云う家並

羽曳野市　麻野幽玄

掃き終えて戻ればもとの落葉道

岡山市　串田句眛地

負けて勝つ胸に鏃をかけてゆく

鳥取県　羽津川公乃

任せると云って監視を怠らず

綾瀬市　大山と金

風当り強い街角の交番

大阪市　欄蘭

口惜しいが悔いなき戦い敗者の弁

米子市　政岡日枝子

うなだれてみせて紫陽花浮気する

奈良市　森田カズエ

ライターの炎が誘う悪の道

唐津市　仁部四郎

無人駅御大典の碑肘を張り

神戸市　山口美穂

裸木に小さな春の芽が眠る

島根県　栂みどり

こしかたの絵巻心の箱に入れ

寝屋川市　稲葉好子

皮ジャンの中身はうすーい心臓

西宮市　朝山千世子

明日不信健脚誇った過去空し

唐津市　新岡回天子

ご馳走さんと言ったにしては河豚残り

唐津市　山下勝一

七五三袋につめた飴と夢

唐津市　浜本久仁於

雑草を生やし蟋蟀鳴かせよう

岡山県　稲岡正之

握り飯味に日本の心しむ

松原市　本多洋子

山茶花の白き香りへ暮る道

豊中市　満仲きく子

わたしか読めぬ字で書く初日記

江津市　杖田よし昭

ピカソ展出る耳朶のほてり恥かしく

島根県　西村早苗

大望を捨て一合で眠る老い

島根県　山根峰雪

長男が公務員となり農地減す

大阪市　藤森小雅子

陽炎の翳り寂しき影法師

唐津市　田中紫浪

いま買えばきっと儲かる株と言う

★投句先　〒560 豊中市中桜塚三丁目13―15 橘高薫風（ハガキに三句）

英訳俳句・川柳をめぐって

竹内紫錦

一、英訳俳句で頭の体操

芭蕉の「古池や」の句の英訳は、十通り以上発表されている。どれでも pond と frog が出て来るから、読めばだれでも、あの句だなと肯く。私がそれを人に見せると、すぐ評論が始まり、この英文は「わび」や「さび」を表わしていないとか、外人に見せても日本文化の紹介にはなるまい、と言われるのがオチであった。

しかし、職場の文芸サークルで、も少し考えさせる英訳文を示すと、クイズを解くような気分で反応してくれる気の若い？社員はかなりいた。句を英訳した人ではブライス氏が有名であるが、この人の著書から例を拾うと、

1. Ah, how glorious
The young leaves, the green leaves,
Glittering in the sunshine!

2. The spring sea;
Gently rising and falling
The whole day long.

原句は、1、あらたふと青葉若葉の日の光（芭蕉）2、春の海ひねもすのたりのたりかな（蕪村）である。やさしい英語だから読者も想像がついたのではあるまいか。

次に、人の知らない句の英訳例を俳句は素人の技師十人に見せて、実験をやってみた。その一つ。

3. The cherry blossoms!
They have made a daimyō
Dismount from his horse.

思い当る句はない、と皆がいうので、「ではこれを和訳し、五七五調に仕立ててみよ」と注文をつけた。すると、各自少考したすえ

◎馬降りる大名の手の桜花
○大名を駒をとめたる桜かな
大名を馬からおろす桜かな（原句通り）

といった答が出て、一同「やさしいもんだ」という顔付。そこへ現代作家がやって来て、一茶の原句よりも俳句らしいという句（◎、○印）を選び出した。

そんなことを十数句について、試みているうち、切れ字の「や」や「かな」の用法がつかめたらしい。要するに情景と、普通の訳語が頭に浮かべば、写生句は直訳で大体ものになったようである。

「頭の体操」という意味では、英文をみせたり絵を示して、訳詩者のような立場になってくれた方が、私の勧めに乗りやすかった。語学の勉強でも、一つの内容にどのような表現があるのか……に参加者の興味が集まるものなのである。

二、寺田寅彦の指摘

これよりはるか昔に、寺田寅彦集の『柿の種』の一節に英訳俳句の話題がある。ウエインライト氏が芭蕉の句を英訳した実例を見た寅彦氏が、それを忠実に逆翻訳してみた。例えば、「如何に速く動くよ、六月の雨は、寄せ集められて最上川に」――といった調子になったそうである。これの元が何であるかは言うまでもあるまい。もし、俳句の簡潔さを重んじて短い英文にした結果意味が通じなければ、元も子もないわけだから、どうしても長い英語になる傾向があるのだろう。

ことわざの類は、東洋と西洋では違う生き物を登場させて含意を伝えるくらいだから、原句を直訳したのでは説得力が薄くなる。とくに、日本独得の風習をふまえた警句や川柳を翻訳してみたとしても、外国人に通じにくいものになりそうだ。しかし一方、ルナールの有名な「博物誌」は、古川柳に似た着想があり、動物の姿態や動作を人間に置きかえたうがち味に共感を覚える点が多い。こういう範ちゅうの作品は、字数とか、韻をふむ約束とかを無視して外国語に訳しても結構歓迎されるのだから、川柳も、ほどほどの長さ――二行か三行の詩型、あるいは新聞の見出しのような形――を取れば、それなりに肯かれるものではあるまいか。

三、川柳の英訳

先に挙げたプライス氏（英国人）は、川柳の英訳も多数試みており、古川柳から明治・大正の作まで、約六〇〇句を訳されている。英語の説明つきである。

次の三句は、やさしい英語だから、クイズのような気分で読んでいただきたい。

4. The chicken
Wants to say something,
The way it's using its feet.

5. The End of the Year
Is coming;
Tell all the lie you can.

6. When we want to cherish
Our parents,
They are no more.

それぞれの原句は次のとおり。

4、鶏の何か言ひたい足づかひ　古句

5、うそをつけとの大みそか来る　古句

6、孝行のしたい時には親はなし　古句

さて、川柳の翻訳運動に熱心だった作家に故阿部佐保蘭氏がある。氏の句集『鶴の姿』を読むと、「川柳雑誌」に翻訳論を執筆した何人かの先輩の努力やプライス氏を訪問した話などの紹介があるが、和歌や俳句の翻訳の先例をみても、外国人に理解させることの難しさをここでも述べている。佐保蘭氏が代表作を英語あるいは仏語で表現したいという意欲は、巻末の数ページから窺われた。なお一般に、英訳むきの句とそうでない句があることは、英訳を依頼された人がみな語っている。

最近では、佐賀の撫尾清明氏（英語教師）とアランクロケット氏の共同で川柳英訳集が出されている。番傘の句が中心だがここでは

7. Throwing off my clothes,
My own home's best, I say.

8. Happening to get a meal
Better than the window display.

を紹介する。原句は、7、ぬぎすててうちが一番よいという（水府）8、サンプルにまさるランチにめぐりあい（萬楽）である。

四、手数をかけて鑑賞

むかし、民謡をドイツ語に訳して座興に供した高校生、あるいは日本の歌曲をまじめに英訳しようとした人々があった。私は、目下のところ、英訳川柳を外国人に見せて「日本文化」を知らせようという気持はない。やるときにはまじめに、標語や十四音、十七音を含めた短文を、韻律もぬきで英訳し、作者の見つけどころに肯いてもらえば充分だと思う程度である。英会話ばやりの昨今、そういう句語が座談の見出しか結びに使えそうなので記憶してもらう価値があるかもしれない。だから、日常ある程度英語になじんでいる人（川柳人口の何百倍か）に、右に挙げた訳例を見せ、ひとまず考えさせ、原句をあとから出して、ナルホドと思ってもらえばいい。つまり「手数をかける鑑賞法」なのである。これは、川柳塔の読者よりも、その子弟の若者たちに試みたいくらいである。

私が勤め先で職場対抗の紙上俳句大会を主催したが、毎年全社員一五〇〇人のうち二割近くが参加した。このとき、当季雑詠を募っただけだったが、念のため「題がある方が作りやすい人は「雪」を題にして下さい」と注記したところ、なんと集まった句の五八%が雪をテーマにしたものであった。

また、テレビやラジオの影響であろうが、「折句」を正月の社内報で募集すると、投句者が多数あった。つまり、余興でも本気でも、最初は、条件に縛られた形で、ある枠の中に文字を埋めるような作業に没頭する人が多い。もし、入賞しなかった時、題が自分に向かなかったが、おつき合いで応募した——という言訳も言えるわけである。もしそこで、入選すれば、味がつかめてその道に入る可能性が大きくなる。

さて、高校級の英語ができる人に英訳句を見せて、句としての表現法を学ばせるのも、人を誘う意味がありそうに私は思う。英訳句を外人相手でなく、日本人相手に使おうというわけだ。なお、俳句を作った漱石も寅彦も英語は達者であって、これは両立する。

私はまだ人の句を英訳する自信はない。自句ならば、長い間には自分が納得する表現を思いつくこともあろう、と楽しみにしている。最後に自句自訳の例をおそるおそる記そう。

9. Like a negative,
White hair and golfer's tan.

10. Lifting his glass to his forehead,
He turns it down.

原句は9、ネガフィルムめいてしらがのゴルフ焼け、10、老眼鏡おでこに上げて却下する、である。クロケット氏に添削していただいた。

（科学技術翻訳家）

さよなら津田与史さん

野村太茂津

津田与史さんが永眠した。川柳塔社同人であり、川柳わかやま吟社の蔭の主幹ともいわれた人だ。古稀祝賀記念句会を翌日に控えたその前夜静かに葵水の所へ逝った。

編集責任者として、川柳普及と新人育成に最期まで心血を注ぎ、川柳を愛し続け「わかやま」の知恵袋としての功績は大きく、その情熱は病床でも衰えることなく、死の間際まで、指の力が弱りペンをポロリと落としながらも続けていた。十二月九日の夜まで書き残している。体力は弱る一方であったが、明日の川柳を書き続けた精神力は、我々凡人の遠く及ばない唯々頭の下がる思いである。

静かに話す言葉はおだやかで、若い頃、住友金属労組の書記長という斗士として活躍した面影は微塵も表面には出さず、主幹の私を支え援けてくれた。決して口には出さず、先に手を出し実行してくれた人だった。

梯一つ転がすことのむつかしさ　与史

この句を深く味わってみるとき「川柳わかやま」運営に苦労した当時のことが、昨日のように思い出される。灰汁の強い私がどんどん前へ引っ張る、ブレーキをかけるのは彼であるが決して後から背を押したり煽ったりはしない。そしてブレーキを弛める、そんな人だった。

個人として川柳を楽しむ人は多いが、川柳のために献げ、川柳のために悲しみ苦労し、川柳のために歓び、川柳のお蔭を感謝しながら喜んで死んでいった人は少ない。

与史さんにすまないと思うことが一つある。それは高野山へ「没句供養句会」に行く坂道を私の車で走ったときのことである。丁度秋酣わの頃で、彼は絵に堪能で高野杉に蔦かづらの紅葉が美しく巻き、連山は絵のような秋景色であった「太茂ッつァん、ハンドル頼むで」と云いながら絵心で秋景色を説明してくれたものだった。時折「高野山の秋へもう一度行きたいナ」と云うので「今年こそ行こう」と約束しながら彼の体調を考えて果せなかったのが残念でならない。

与史さんの仏前に「日本川柳人名鑑」を供えて合掌するとき、津田与史作「没句に捧げる詞」の名文を奥の院で私が朗読したときのこと、和尚が袈裟衣を揺って噴き出したのが強く印象に残っている。楽しかったこと、一緒に苦しみ悩んだこと等が走馬灯のように尽きない思い出となって胸を駈けめぐる。

十二月十四日は「わかやま句会」古稀祝賀記念と銘打って、武雄、勇太、与史、古稀三人の選者であったが、私が与史になり切るために死の直前まで枕頭に行き彼の心の匂いを嗅ぎとりに通い、そして軸吟、兼題投句作品を受けとったのが最期となった。

ふしくれた十指で堪えた人の道　与史

秀句として選んだ句は、与史さんの最期を飾るにふさわしく、怖いほど代選の私の胸を打つ秀吟であり涙を禁じ得なかった。

人生を終えるみごとな夕焼けだ　芳朗

ありがとう与史さん。さよなら与史さん。

合掌

高橋可保留氏を悼む

尼　緑之助

本誌の同人で「いずも」の同人でもあった高橋可保留さんが、十一月三日長逝された。

五三年暮れだったか、胃腸手術のため入院されて見舞ったが、手術後の経過もよく、意外に元気で明朗だったので安心もしたのだが弟さんからの耳に入ったのは一寸心配な言葉だった。「癌」？と直感した。私も長男がこの経験を持っていたので、大きな不安に駆られたが、退院後、極めて順調のようで、元気回復、例の快活さが続き、私の杞憂だったとも思ったことである。グループの世話も積極的で、私のよき協力者だった。

昨年六月頃から、いささか不調の色が見えはじめ、その後、自宅で療養、ご家族の様子から不安が濃くなった。私も見舞ったが、都合悪く面会が出来なかった。それから間もなく訃報に接したのである。話したいことが山ほどあっただろうに。

彼の川柳歴は昭和五年から、当時住所が若干離れていたので（現在の感覚から言えばそうとも言えないが）活動状況を活字で知る程度だった。本人の弁では十六年頃で休火山状態に入ったとのことであった。昭和五十一年一月、突然氏の来訪を受け、出雲市に居を定められてから十数年になるとのことだった。それから「いずも」に参加、川柳の復活となった。

旧知の人も多いし、温容で交際も円満、忽ち「いずも」の柱になっての活躍が始まり、本誌同人としての参加等、出雲高校の事務長を最後に自適生活の中から、子息達にも恵まれ、幸せ多き完成の数年であった。

五十三年から地域老人クラブに「川柳部」を設置、私が一応講師としてお邪魔したが、氏が中心、その後、老人外の一般の参加もあり現在では大きく成長したが、氏の功績でもある。

何としても痛恨事、彼の温容が脳裡を消えない。定めし語りたいことが限りなく残っていただろうと思われて仕方がない。

氏と近所でもあった原独仙氏がもっとも懇意の間柄だったと思うが、共に話し相手を失った打撃は尽きない。

遺句を拾って追憶して見る。

眼鏡越しお茶のこぼれをとがめられ
素晴らしい夢と独りでほくそ笑む
身構える鍬の向うに白い雲
筍に迷惑している腹工合
帰省の娘禁酒の父を淋しがり
追いもせず追われもせずに古稀の春
お人柄妻から見れば頼りない
お喋りの佳境は箸を持ったまま
休耕のよどみに群れている目高
川釣りのビクをのぞいた柳の芽

寒中お見舞申上げます

同人のみなさま

時節柄ご自愛下さい

和歌山短詩型文学クラブ

七面合同句会一同

三幸川柳教室

中筋三幸

菅井智水庵

嗚呼　堀口塊人さん

橘高薫風

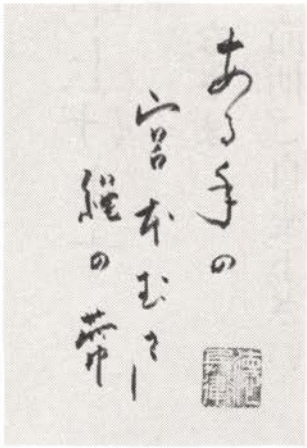
辞世　川柳の木守柿とは僕のこと

塊人さん（西宮市）は病気療養中のところ十二月十四日午前六時、脳軟化症のために死去された。昨年十一月二十三日の豊中の川柳大会に一時間に亘る講演をされたので、その急逝には柳人の多数が驚いた。行年七十七歳戒名慈照院済道隆誠居士、ご冥福をお祈りする。

塊人居は、私が世話をしている西宮北口川柳会の会場、中央公民館に隣接しているので暖い日には散歩に出られていたのを時折見かけたものだ。十二月八日（月）の句会の帰りに寄ってお見舞いしたかったのだが、丁度その日は川柳塔の本社句会の日だったので素通りした。翌日、伊藤入仙氏から電話があって塊人さんの容態の悪化を知らされた。入仙氏は八日に見舞われたのである。十一日、中島生々庵主幹にその旨を報告して私は塊人居を見舞った。先客に地黄天国氏がおられ、塊人さんは点滴中であった。夫人のお話によると旬日食物は咽喉を通らず紅茶で口をうるおす程度であるとのこと、意識はなく、ただ点滴の注射針を抜く時の痛さに意識が戻ったものか、空ろな目を開いて「おお!!」と言われただけであった。

それでも数日前までは年賀状を書いておられたらしく、机上には賀状の束が積まれてあった。

どなたかは存じませんが初詣
大さむ小さむ会津磐梯山のはる
合鴨もとてもおいしい京料理



カット　ある年の宮本むさし縄の帯

この方がもっとおいしい流れ海苔
流れ海苔みちくる潮ともろともに
おまへんやおへんどころか数の子も
祇園さんからお火いただいて京料理
紅白はひがしが勝って初日の出

一寸読むと右のような具合に続いている。つまり塊人さんの賀状は同じ句が二枚とはないのである。歌仙をまくように次から次へと発想が展開して即座に句が仕立てられる。これは日記川柳を長年手がけられていた塊人さんの特技で、まるで昭和の井原西鶴とでも言えそうなものだが、書物の好きな博覧強記の塊人さんならではの事と合点がいった。作品も文章も弁舌も、それぞれが一流だった。柳徳兵衛のペンネームを愛用されて縦横に健筆を振われたものだったが、もっと長生きをして戴いて、関西の川柳史を書き留めておいて欲しかったと思う。

塊人さんとの古い思い出は、川柳文学の豊国神社社務所での句会から、旧鴻池邸の大阪美術倶楽部での句会など数多くあるが、中でも昭和三十六年十一月五日の明和川柳研究会（西宮市、故河相すゝむ氏主宰）での例会が印象に残っている。その日は、麻生路郎、椙元紋太、堀口塊人という巨頭の顔が揃って、それぞれの作品を互いに選をされたのであった。

いつのほどにはかつぎやの籠となり　路郎
秒針は精確今日は子供づれ　紋太
釣った魚籠へ入れると小さくなり　塊人

秒針はいそがしそうにひまそうに　塊人
まだちょっとおますと頭なでてみせ　〃

葬儀は十二月十五日午後二時から逆瀬川の平林寺でしめやかに営まれ、柳人多数が参列した。日本川柳協会・西尾栞常任理事が弔辞を読み上げ哀悼の意を表した。

最後に、明治三十六年七月十一日生れの塊人さんが昭和三十八年に出された自筆の句集「九十九抄」の中から作品を抄出する。

ふるさとのあのポストから来た手紙
夫婦とも身寄り少なく除夜の鐘
古切手かつて満洲国在りき
月もおぼろに悪人の美しさ
もろともに白狐と化して文五郎
掛取の女と話す昼の雨
論語読むあんまり株が安いので
しきりなる落葉の中の不孝者

弔辞

謹んで日本川柳協会最高顧問、故堀口塊人先生の御霊にお別れの言葉を申し上げます。

本年十一月廿四日豊中市文化祭川柳大会には先生のお話を拝聴致し、先生の御健在を目の辺り拝見致しまして我が国柳界の益々確固たるを確認して安堵の胸を撫でおろしたのも束の間、あの日より丁度二十日、こんなに早く先生とお別れしようとは夢にも思いませんでした。

六巨頭歿き後の先生は我が国柳界のたった一人の長老として、大御所として、又、日本川柳協会の最高顧問として杖とも柱とも頼りにしてまいりましたのに、今忽然として私達の前よりお姿を消されるとは何たる川柳界の不幸でございましょう。

先生は唯今、川柳文学社の顧問として活躍されておられますが、他の柳社の喜び事悲しみ事にも率先してご臨席になり或いは祝辞、或いは弔辞をのべられまして欣びも哀しみも共にされた洵に大らかな先生でありました。

また昭和五十年、日本川柳協会が発足するに当り、その難関をリードされて立派に日本川柳協会を創設されて今日の日本川柳協会の隆盛の礎を築かれました。また先生の柳話は素晴らしいお話で、その蘊蓄内容の豊かさ、お話の間合等は柳界随一の定評があり、先生の柳話のあるなしで入場者の人数が決まるという程でありました。唯今、大切な大切な先生を柳界から失うことの将来を思う時、洵に暗澹たるものがございます。

先生、今後の柳界をあの世から何卒ご指導賜らんことを偏えにお願い致しまして、お別れの言葉と致します。

先生お静かにお眠り下さいませ
さようなら

昭和五十五年極月十五日

日本川柳協会常任理事
川柳塔副主幹
西尾栞

第16回 大陸川柳作家同窓会

とき　昭和五十六年三月二十一日　午後二時

ところ　神戸市垂水区舞子町
舞子ビラ（国鉄舞子駅徒歩十分）
TEL〇七八・七〇六・三七一一

日程　三月二十一日午後二時舞子ビラ集合、三時貸切バスにて明石市浄蓮寺へ、故大井正夫句碑前にて参拝法要、午後六時から舞子ビラで前夜懇親宴
二十二日午前九時から川柳大会
正午閉会解散、午後は「神戸ポートピア」「異人館めぐり」等自由行動

費用　一万七千円（宿泊・宴会その他）

兼題　青竜刀（大陸吟）福井　天弓選
裾野　山田　良行選
昼顔　渡辺　蓮夫選
ベレー帽　増井不二也選
各題二句　〆切午前十時

主催　大陸川柳同窓会
代表　福井天弓
世話人代表　東野大八他

参加希望者は二月末日迄に会費の全額又は半額を左記宛申し込みのこと（句会のみ参加は千円）〒657神戸市灘区原田通二丁目二―一五　森田日の出

初歩教室

題 ― 身勝手 ―

本田恵二朗

句を創るということは、まことに孤独なしごとだと思う。でも孤独だからこそ、其の中に、それぞれが持っている思索の総てを投入することが出来るのだと思う。

孤独の中には、愛情がある、寂しさがあるロマンがある、そしてドラマがあり、詩がある。句を創るというしごとは、句の中に句主の血を輸血することである。即ち生きた句を産むことである。故麻生路郎先生は『生きた句を作れ』と叫び続けられた。その至言は、われわれ門下生たちの心に強く焼きつけられている。そしてそれを実現するべく精進し続けているのである。

母なれど身勝手ならぬ新世帯　房子
旗印見逃すまじと観光団　同
（ガイドの旗無視して歩く身勝手者）

身勝手な人だが妙に憎めない　ふみ
身勝手な頼む時だけ顔を出す　同
（頼み時だけは身勝手な笑顔見せ）
お一人の身勝手会合座が白け　貞子
（その中の一人の身勝手座が白け）
身勝手を気づけど通す気の重さ　同
犬食わぬ喧嘩身勝手なことにより　昭治
（身勝手な喧嘩へ犬もそっぽ向く）
身勝手なところ貴方によく似てる　同
（身勝手なとこが貴方にそっくりよ）
長電話かけなと言うて長電話　柳五郎
無駄な灯は消せがテレビに夜を更かし　同
長尻をすなと言うくせ鉄砲だま　同
身勝手な嫁の振舞いすきま風　福子
（身勝手な嫁が作った隙間風）
情なき身勝手愛を斥ぞける　同
（身勝手な冷たさ愛を斥ける）
好き嫌い云う身勝手な下心　句味地
大へいな仕草に身勝手透いて見え　同　帆雀
身勝手があふれ公器に点火する　同
身勝手な紙幣が舞わす金屏風　同
身勝手にプライベートを覗かれる　佐代子
身勝手な蔭で一人の女が泣き　同
（身勝手の蔭で女が一人泣く）
身勝手を注意し罵声あびせられ　美佐
（たしなめた身勝手にどなり返えされる）

身勝手な上司に堪えるゆとり出来　同
（上司の身勝手を扱うコツ見つけ）
身勝手な口が示談をてこずらせ　胡頽子
（身勝手な舌鋒示談をてこずらせ）
身勝手な自由をかざす反抗期　同
身勝手な話を家裁は聞き飽きる　武水
身勝手が身勝手責めて論果てず　同
（身勝手と身勝手水かけ論果てず）
身勝手はお互さまと謝らず　利美
（身勝手はお互いさまよと折れ合わず）
わが身内だけはつき合い派手な妻　同
床上げと聞いて頼みにやって来る　泰雄
（床上げと聞いて早速頼みに来）
身勝手と前置きあれば断れず　同
（身勝手と頭下げられ断れず）
身勝手は後日お返し致します　同
身勝手な二人に秋風たちはじめ　三男
不都合なことは聞えぬ老夫婦　同
身勝手なことだけ喋りいんじまい　同
（身勝手ばかり喋ってハイさようなら）
身勝手さをわびる心に虹が立つ　千子
身勝手な人自己中心に日が暮れる　同
（三百六十五日自己主義で通し）
幼児の身勝手は人を笑わせる　同
（満二歳の身勝手振りに茶の間湧く）
常識無い身勝手が通るのも現代　保夫

（非常識な身勝手が通る世を嘆き）
身勝手は本家の立場だから言え　同
（本家という立場が身勝手はばからず）
身勝手に大正生れはただあきれ　同
（身勝手へ大正生れがあきれはて）
身勝手に翔ける一羽が撃れけり　静枝
身勝手な吾子に個性を期待して　同
（身勝手な吾子の個性を信じよう）
年寄せて身勝手すべて禁句とし　同
（身勝手は言うまい齢をいたわろう）
身勝手が過ぎてみんなの鼻つまみ　露杖
姑の身勝手さびしさから逃避　同
（姑の身勝手はさびしさの逃げ場かも）
身勝手はどちら己を省みる　同
（身勝手はどっちか天秤にかけてみる）
身勝手な甚敵同士で仲が良い　英子
陽の当る場所だけ選ぶ身勝手さ　同
言うだけのことは言うても耳かさず　同
（言いたいこと言うだけ言うて耳かさず）
身勝手が醒めた女の薄化粧　小雅子
身勝手を独身主義にした女　同
当選をすれば公約知らぬ顔　峰雪
看板を選挙目当に塗りかえる　同
不利と見て革新俄かに自衛論　同
身勝手に自分の彩を主張する　三千代
身勝手をコンピューターにあばかれる　同
身勝手な一人に酔いも興もさめ　同
喋るだけ喋って切った長電話　紀久子
身勝手を棚に上げてる身勝手さ　同
身勝手な恋をお札でけりをつけ　同
身勝手な男憎めぬ芸をもち　武太
身勝手な話素通りさせておく　同
身勝手がきびしいツケではねかえり　同
身勝手な大人を真似てエゴイスト　慶彦
屁理屈をつけて身勝手謝らず　同
それにしても身勝手過ぎるコマーシャル　同
身勝手に生きて世間を狭くする　同
身勝手を女人菩薩に裁かれる　寿子
戒めの中で身勝手宙に浮く　同
身勝手を研いだ刃に試される　同
身勝手が権利ばかりを振りかざす　瓢太
身勝手に育った息子持て余し　同
十円玉ボイと身勝手な願いごと　同
身勝手な奴ばかり育て民主主義　同
身勝手に伸びると花も実もつけず　勝美
身勝手の手から幸福こぼれ落ち　同
身勝手へ神も仏も手を貸さず　同
身勝手へ友一人去り二人去り　同

題―理想　**―2月20日締切（4月号発表）**

宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
〒七一一　本田恵二朗

一分間の柳論

高橋夕花

柳論などおこがましい事は書けませんが、私なりに苦心していることを申します。俳句から入りました当初、つい文字の遊びに走りがちでした。川柳とは、倖せな時は倖せを、かなしい時は悲しみを吐くように教えられながらも、何時も流してしまう自分を叱りながらも六年過ぎてしまいました。

そして、いつのまにか喜こびを悲しみを、すこしずつ心に刻みながら作句している現在、他人さまの心もすこしは解るようになりました。川柳は人形のように美しくないけれど、確かな命の息吹きなのでしょうか。一読してハッとするような句に出会うと、その方の鼓動がこちらまで伝わってまいります。そんな時、川柳はすばらしいなあ！と手放しに感激してしまいます。ただ、人それぞれに顔がちがうように、伝統もよし革新もよし、川柳の一本道を曲線でえがいても良いのではないかと、身勝手な事を考えています。

第三百五十五回（五十六年度第一回）

大萬川柳「出直し」入選発表

選者　川村好郎
投句総数　三百八十六句
入選　四十八句

出直しの瞳に故里の山がある　堺　一二三
出直して来いと見捨てぬ愛の鞭　八戸　紫峯
出直して来ますとセールスくにけない　大阪　頂留子
出直しへあしたの夢は考えぬ　大阪柳伸
出直しの根性だけは拍手する　兵庫　可住
出直しへ生命を炎やす車椅子　和歌山　寿子
出直しの姿勢きびしい冬木立　和歌山　武雄
来年へ出直す銀杏派手に散り　今治　佳雲

一から出直し地下足袋履く固さ　和歌山　正博
出直しへ恋の炎はもう抱かぬ　八尾　夕花
出直しの鍬に故郷の目が温い　西宮　春江
出直しを誓った道に立往生　兵庫　招一
出直して来たのにやっと手形くれ　枚方　星斗
出直しの絵馬には禁酒と書いてあり　大阪　利義
出直しの故里雪に見送られ　尼崎　千子
出直しの効かない齢へ社のピンチ　大阪　道子

人生は長い出直しためらわず　大阪　ふみ
霜月が過ぎて出直し考えず　大阪　炉斎
定年の出直し人生へ逆らわず　河内長野　喜酔
出直しへネオンしつこいほど招き　米子　雄々
職訓所出直す人の目が光り　倉敷　方大
出直してからの変った靴の音　大阪　勝美
再起の足先づ玉砂利を踏みしめる　守口　右近
出直しに堪忍袋も持ち歩き　米子　越子
出直しへ北風寒い日が続き　倉敷　素身郎
出直しを退職金の巾で練り　松江　与根一
出直しの試しに買った宝くじ　尾鷲　伊津志
三浪の出直しコース少し替え　倉敷里風
失敗を糧に出直す歩のたしか　三重　渓水
出直しの集金今日も無いと言う　大阪　武太
出直しへ昨日の傷が追ってくる　笠岡　忠三
出直しへ私の過去は伏せておく　島根　早苗
出直してくるとは嫌な勧誘員　出雲　夢酔
出直しの眉宇頼もしく見送られ　岡山　凡太郎
出直しも高給が待つ天下り　大阪　文秋
出直しに邪魔な甘えがまだ切れず　大阪　好一
出直せよ僕にも同じ過去がある　神戸　どんたく
出直して一人で来てねに惑わされ　出雲　夢酔
出直して来いとは少し値切り過ぎ　岡山　凡太郎

佳句

出直す日へ母は暦を持ってくる　大阪　君子
出直しを心に決めた茜雲　大阪　智子
見栄捨てたとき出直しが始まった　大阪　智子

尼崎　千子

素裸で出直して来いと親心
出直しの帰郷へ温い目冷たい目

人ノ句

大阪　柳伸

出直しの胸は喪服を離さない
出直しのチャンス私に齢が無い

地ノ句

交野　テルミ

一　**美幸**　四・〇　八尾
二　**テルミ**　三・〇　交野

第28回 大萬川柳大会

日　時　**二月二十二日(日)** 午後一時
会　場　**大萬**（大阪市阿倍野区松崎町三丁目）
会　費　五百円
司　会　西田柳宏子
開会の辞　若本多久志
挨　拶　中島生々庵

昭和五十五年度ベストテン表彰

特別課題　「念　願」　西尾　栞選
兼　題　「　絆　」　藤岡花楢選
　　「秘　密」　飛田好一選
　　「メンバー」　小西雄々選
　　「抱　く」　高橋夕花選

「足　元」　浦野和子選

席　題　当日二題
選者　若宮武雄・野呂右近
（兼席題共三句以内）
閉会の辞　菊沢小松園

ベストテン懇親会

選者の方で当日欠席の場合は、早い目に左記へご連絡下さい。
投句だけの方は郵券二百円、各題別に柳箋または便箋に記載して二月二十日までに送って下さい。

〒592　高石市高師浜三丁目五―六
川村好郎

主催　**大萬川柳会**
後援　**川柳塔社**

天ノ句

八尾　美幸

出直しははぐれないよう手をつなぎ
選者吟
毎日が出直し昨日をふり向かず

昭和五十六年度第一回
ベストテン（十二月現在）

一〇　**君子**　一・五　大阪
三　**智子**　三・〇　大阪
四　**柳伸**　三・〇　大阪
五　**渓水**　二・五　三重
六　**千子**　二・五　尼崎
七　**どんたく**　二・〇　神戸
八　**好一**　二・〇　大阪
九　**文秋**　二・〇　大阪
以下略

昭和五十六年度第三回

「**想　像**」　三句以内
締切　二月二十日
第四回
「**範　囲**」　三句以内
締切　三月二十日

投句先
〒593　堺市堀上緑町一―三―七
藤井一二三方
大萬川柳係

NHK川柳募集

課　題　「**親**」　選者　**川村好郎**

ハガキに三句以内を書き、二月十日までに左記へご投句下さい。

〒540　大阪市東区馬場町　NHK大阪放送局
◎入選発表は2月28日（土）ラジオ第一放送（全国放送）午前九時十五分「老後をたのしく」の時間。

小西無鬼氏から

金一封

拝受致しました

有名

原独仙選

有名になって自由が還えらない　可住
有名校ますます狭き門となり　秀子
ふるさとの有名な山力士の名　三和
有名になれぬ夫でよく眠る　文平
その道の深さ名が売れまだ迷い　茶人
有名な人が汚職に名を連らね　登美也
有名な妻を夫が妬いている　七面山
有名人哀れイミテーションの指輪　早苗
有名なピカソ顔負け児等の図画　優
有名も無名も同じ忠魂碑　酔夢
有名になっても猫背直らない　素身郎
離婚した有名税の払い過ぎ　祐
有名な子がいる母の背が小さい　大柏
厳格に育てて有名人を生み　夢酔
オープンカー錦着た子へ手を合わせ　どんたく
有名になる一票へ握手する　カズエ
有名校出ても甘くはない世間　正朗
三面のトップで叩く有名税　与根一
有名になった涙のねずみの絵　みどり
有名人の葉書来ました選挙戦　富子
有名になり親戚が急にふえ　美穂
有名になって自由のない暮し　越子
通行禁止有名人の葬儀とか　虹汀
有名になると無名の頃を恋い　洋々
有名になって家庭を遠ざかり　軒太楼
有名な尺度で書画の値が決まり　代仕男
有名も無名も税務署放っとかず　重人
引退がスーパースターにした百恵　悠泉
有名なわが子へ母は距離をおき　日枝子
売れっ子にライバルの眼背を刺す　はじめ

佳

有名になって味方も敵もふえ　芳子
有名になった頃には父母がいず　勝一
有名になる手段ならすぐに脱ぎ　不二
市場籠エプロンあれが大女優　方大
三浪が有名格言壁に張り　ろ亭

人

有名人貧しき過去が光って来　白李

地

有名な子に有名な親が出来　柳子

天

有名な父のレールを走らぬ子　花子

軸

有名じゃおへんがわいかて日本人

寒い

小島蘭幸選

改札を出ればそこから寒い道　洛酔
寒い朝夫に目立った背の丸み　テル
母さんが行商に出る寒い朝　七面山
いろりにはうんとくべます寒い過疎　ろ亭
永住と決め寒さにも馴れてくる　与根一
年金のくらしが寒い十二月　義美
雪国の人が寒いと云う京都　規不風
隙間風寒い話を持ってくる　里風
太公望吹く北風が負けている　優
寒空に貴方の星が消えずある　美恵
寒いなど云わない父の肩の巾　富子
焚火の輪絵にして故郷の寒い朝　菁居
灯を消せば心も寒くなる孤独　方大
あかぎれの手に糸絡む手内職　公一
寒い日は母のふところ懐かしみ　哲夫
ふところが寒いと貌に書いてある　満津子
銭湯を出て寒い背とすれちがい　可住
ベトナムの難民日本の冬を逃げ　どんたく
寒がりを笑われながら祝う喜寿　正朗
寒そうな肩に木枯し容赦ない　一路
お寺には特別寒い風が吹き　木魚
寒の水行者の祈り届きそう　悠泉
子の笑顔サンタ寒さを忘れてた　佳雲
冬眠を羨やむ朝の寒い顔　一路
寒い日に母は生活の紙を漉く　越子
積む石の一つが悔を抱く寒さ　洋々
ひとり住む寒さ温める子のたより　満津子
年金を十二で割ると背が寒い　酔夢
シベリヤの寒さに耐えた僕なのに　本蔭棒
寒波より寒い心で着ぶくれる　三和
台所妻が出かけた日の寒さ　本蔭棒

凡人の首のうしろにある寒さ　酔夢
炬燵へ入ったとこへ電話のベルが鳴る　素身郎
定年の朝から抱いている炬燵　どんたく
佳
この寒さ春が生まれる音だろう　美恵
愚痴ためて女寒さをきつうする　文平
枯葉よ寒さも詩に替える街　優
寒いバスに造花となっている女　早苗
寒い日もコトリ郵便受けが鳴る　芳子
人
寒がりの女がひとり住んでいる　重人
地
計画の決まらぬままに出る寒さ　三五島
天
初雪の寒さで戻る猫の髭　可住
軸
うしろ姿の寒い男となっている

見舞

神夏磯　道子　選

長びけばお見舞だんだん遠ざかり　きく子
気候見舞カゼをひくなと子の電話　富子
同情の見舞へ男　貝になる　洋々
寒中見舞にそえて喪の人慰める　秀子
市の救助見舞金は涙ほど　綾珠
ひとつだけ真心がある見舞品　規不風
見舞よりお喋りになる顔の色　一進
病人に土足で踏み込む見舞客　芳枝
気にかかる一言残して見舞去り　松高秀峰
見舞客を心待ちする程に癒え　竹馬
消火器の泡見て帰る火事見舞　花子
試歩のつえささえてくれる見舞客　みどり
お見舞の品が目当ての子の見舞　軒太楼
ガン見舞心のチャック閉めて行く　夢酔
今日の見舞妻にはピンときたらしい　素身郎
盗難へ見舞が腹を立ててくれ　大柏
病気見舞とにかく無難な金一封　春日
ワイワイと嵐のように来た見舞　重人
食慾が出て好物の見舞届き　越子
酒たばこ断つ約束をする見舞　里風
悶着の果ての冷たい見舞金　胡頽子
災害の見舞車で通り過ぎ　喜一
義理だけの見舞一度でもう来ない　神田秀峰
焼け太り何とお見舞言おうかな　一路
病人の泪に見舞とちるなり　与根一
縫る目に見舞はうしろ髪引かれ　本蔭棒
先客の果物籠が立派すぎ　満津子
病人に諭されている見舞客　としよ
見舞われて水仙やさしい匂い出す　福子
嘘云えぬ見舞無口で慰める　喜酔
もめてます思いがけない見舞来て　美恵
折りつるが聞いた見舞の独り言　テルミ
見舞客顔色ばかりほめて去に　凡太郎
少々はきつい言葉も元ナース　カズエ
点滴が今半分の見舞客　酔夢
賑やかな笑いがもれる産見舞　ふみ
見舞客へ朝から同じ事を言い　茶人
いいきびと思うのもいる火事見舞　登美也
お見舞の一言誤解をまるく解き　優
日めくりに今日は見舞の赤い丸　洛酔
好物もちゃんと知ってる見舞品　芳子
あの人も年賀で見舞うだけになり　正朗
佳
真心を言葉で残す見舞状　伊津志
医者のように病状を聞く見舞客　方大
お見舞が揃って病人不安な目　掬治
治らねばすまぬ貴女の千羽鶴　月仏
前ぶれのあるお見舞へ髪を梳く　可住
人
大病の経験誇る見舞客　四郎
地
見舞われた方が元気な精神科　素石
天
お見舞の話題を花と決めて出る　柳子
軸
親友の見舞手ぶらでかけつける

柳界展望

（原稿締切毎月末）

■川柳塔15周年おめでとう会が、新春1月15日、心斎橋大成閣において開催。主幹はじめ同人・詩友多数参会盛大であった。今後の抱負、決意を語り合い有意義な会となったことは喜ばしいことである。

■〝色即色〟草刈蒼之助作品集が「風発行所」より出版された。著者小歴によると、30歳より短詩型への関心を持ち、河野春三氏と文学行動を共にし、現在に至るとある。本年68歳。サブタイトルに「現代川柳探索への旅」とあり、著者の意欲に満ちた句集と言えよう。集中「ある夫婦の物語」の章より。

平和装う夫婦棲めり垣根のなか　妻活かす道は逃げ込む書架の中　切れそうで切れずに廻る糸車

発行所　〒569高槻市竹の内町22の1河野方「風発行所」　頒価〒共千八百円

■汐風叢書として、月原宵明―その人と川柳―が汐風川柳社より出版された。序文を中島生々庵、仲川たけしの二氏が執筆。内容は3部に分かれ、月原宵明伝・作品集・宵明エッセイである。作品は平明闊達である。

宮仕え真面目にさぼるコツを知り／底辺の水飲んで来た人間味／姿見へ男の威厳たしかめる

発行所　今治市共栄町2―2―23汐風川柳社。

■みかん百号記念句会は1月18日南紀勝浦温泉ホテル浦島にて開催、地元柳人はもとより、和歌山・大阪よりも多数参加、盛会になったことは同慶の至りである。

■第30回西大寺会陽川柳大会は3月1日、西大寺市民会館にて開催予定。父＝大森風来子選、足音＝水粉千翁選、役人＝中尾藻介選、仏＝時実新子選、善＝橘高薫風選、聞く＝浜野奇童選、壺＝森中恵美子選。

■山根梟人氏（島根県川柳協会長表彰）園山多賀子さん（川柳塔準優秀賞）角耕草氏（島根県川柳大会優勝）石倉芙佐子さん（出雲市川柳会賞）の受賞を祝う祝賀忘年川柳大会が、いずも川柳会の主催で、去る12月14日出雲生活センターで盛大に開催された。なお、いずも川柳会では、本年5、6月頃、久家代仕男、堀江芳子両氏の還暦祝賀会を行われるとのことである。

▽同人・柳人消息△

■東野大八氏（美濃加茂市）体調90％回復の由何よりのこと、百％の御回復を願うこと切。

■直原七面山氏（岡山県）12月7日津山市大谷石山寺境内に第8句碑を建立された。行く末は知らず女と旅に居る　柳運益々隆盛、まことに目出たい。

記念句会における軸吟は「結婚記念に植えたリンゴの実が真っ赤」七面山

■児島与呂志氏夫人（藤井寺市）入院加療中であるが手術の結果極めて良好のこと。何よりのことである。

■槇田英詩氏（呉市）ご尊父昨年12月9日御逝去。合掌。

■山内静水氏（竹原市）より、竹原五十五年度賞作品が次のように決定したとの報せあり。

一席＝気まぐれな彩は持たない冬の花（時広一路）

二席＝コンパスを使わぬ丸が生きている（村井西合）

三席＝子の絵本ひととき戦さ忘れよう（小島蘭幸）

努力賞＝岩本笑子、奨励賞（小学五年生）＝瀬川希世子

■藤井明朗氏（島根県）多年の農業研究調査の功績により、農林水産大臣賞を受賞された。おめでたい限りである。

■谷岡芳枝さん（島根県）昨年11月より入院加療中の由、一日も速い御全快を祈る。

▽日川協通信△

第5回全日本川柳大会

日時・昭和56年6月21日(日)午前10時開場

会場・金沢市下本多町6―

27「金沢市観光会館」二階大集会室
電話（〇七六二）二〇―二五〇一㈹
（国鉄金沢駅前より比陸鉄道バス①番、花里経由東部車庫行か城南一丁目行に乗り本多町下車すぐ前）
宿題・第一部（事前投句・5月31日締切）
「城」　増井不二也選
「川」　野村　圭佑選
「姿」　礒野いさむ選
3.5×18㎝の句箋一枚に一句ずつ記入、句箋は無記名、封筒に住所、氏名明記、投句料千円（定額小為替か現金書留）同封、5月31日必着で〒556・大阪市浪速区敷津西2丁目6―15、日本川柳協会大会係あて。
壇上座談会・「柳界に何をのぞむか」
発言者＝大野風柳・河村日満・斉藤大雄・寺尾俊平・尾藤三柳・森下冬青
司会＝永田帆船
宿題・第二部（当日出句・午後〇時半締切）
「輝く」　越郷　黙朗選
「スリル」　丹羽　麦舟選
「花嫁」　伊藤　茶仏選
「旅行」　西尾　栞選
各部各題とも二句あて、未発表作品に限る。
会費・千円（第一部投句に投句料納入した方は無料、投句者、出席者全員に発表誌を後日郵送）
表彰・文部大臣賞（一名）川柳大賞（一名）川柳大会賞（五名）

▽句会案内△

■菜の花句会
時。2月10日（火）夕6時
場所。八尾神社内西郷会館
兼題。使者、ひよこ、偶然、大阪風景、研ぐ
連絡先―高杉鬼遊

■南海川柳会
時。2月19日（木）夕6時
場所。南海会館ビル本社地下食堂
兼題。義理、育ち、にらむ
連絡先―辻圭水

■南大阪川柳会
時。2月20日（金）夕6時
場所。松崎町三丁目大萬
兼題。二の足、サイズ、容器、便利、その場
連絡先―金井文秋

■東大阪川柳同好会
時。2月28日（土）夕6時
場所。東大阪中央公民館
兼題。台本、個展、髭、寒がり
連絡先―斉藤三十四

■堺川柳会（150号記念句会）
時。2月11日（祭）正午12時
場所。堺市民会館4階和室
兼題。酒、遊び、マッチ、魅力、天
連絡先―河内天笑

（酔）

追慕

不二田恒子

帰らない夫と知りつつ待つこころ
この町の露路を愛した老作家
退院の下駄がむなしいまま帰り
依估地さは作家生活五十年
川柳塔　一三夫一三夫と書きなぐり
眼鏡拭きつつ亡夫への便り読むつらさ
方向音痴の夫が気になる死出の旅
目覚めれば回り灯篭廻るだけ
今夜また泣きそうひとり夜具かぶる
金魚の死いよいよ私はひとりぼち

寒中お見舞い申し上げます

竹内寿美子	松江市国屋町三八一
豊田巡歩	松江市上本庄一六九―四
石坂新雪	松江市西川津町七四八
梅本登美也	松江市東奥谷町一六九―一
恒松叮紅	松江市雑賀町一六六八
舟木与根一	松江市西忌部町六八―一
小林孤呂二	松江市灘町一五五
柳楽鶴丸	松江市菅田町二四―九
中川晃男	松江市上乃木町三六四
岡崎祥月	松江市法吉町五〇
吉岡逓児	松江市菅田町二四―七

堺川柳会　同人一同

（五十音順）

青山慶之助
大道美乙女
小川耕人
川合ミツヱ
河内天笑
河内月子
小谷清女
清水健司
新谷笑痴
高橋千万子
武津柳影
寺井東雲
林宏子
伏見茂美
藤井一二三
水野上備後桜
南川昌水
和海草春

本社新年句会

会場　金属会館
七日　午後六時

寒さもややゆるみ、出席七九名。短冊交換会は恒例どおり瓢太氏のお世話。初出席は東大阪の米田喜一郎氏。55年度月間賞永久保持者（弥生さん欠席で糸葉さんが代理）、同本社句会全出席者三十名を表彰。代表で賞状を受けた規不風氏は桐下氏と共に兄弟揃って京都から全出席された。約一年ぶりご出席の多久志氏の元気な披講ぶりも嬉しい限り。本年最初の月間賞は山本規不風氏が獲得。（史）

（受付―与呂志・敏・重人）
（進行―柳宏子、記録―鬼遊）

出席者―翠光・敏・与呂志・重人・幸太郎・万里・雅風・瓢太・勝美・酔々・滋雀・好一・喜一郎・綾珠・小路・憲祐・潮花・水客・栞・健司・太茂津・川狂子・紫香・たつお・星斗・英子・千万子・右近・糸葉・頂留子・夕花・文秋・多久志・形水・喜風・生々庵・萬的・恒明・弘生・善紫・眉水・笛生・静歩・射月芳（みずほ改め）・山久・湖風・史好・度・天笑・悦郎・小雅子・〆女・吸江・以兆・三十四・作二郎・柳宏子・あいき・規不風・桐下・英王子・恭太・弘・岳人・千代三・涼一・花村・鎮彦・好郎・寿子・鬼遊・亜成・美乙女・雀踊子・小松園・柳伸・凡九郎・薫風。

席題「開く」　**宮口笛生選**

痛烈に心開いて呉れる友　規不風
改名をして開運を期待する　みずほ改め射月芳
医学部の門をキャッシュでこじ開ける　弘
いい年かも知れぬパチンコよく開く　恭太
開運の扉に合わす鍵がない　湖風
開けたのに入って来ない福の神　射月芳
真面目な話女の部屋は開けておく　鬼遊
溜め涙窓を開いてからこぼし　〆女
でもでもと女は心開かない　千万子
鼠来て鏡開きを繰上げる　雅風
開けにくい戸ばかりになる午前二時　憲祐
三面鏡開くと哀しさ増すばかり　夕花
御仏の開扉如来の眼の光り　喜風
苛々とさせて踏切まだ開かず　〆女
聖書を開くと善人らしくなる　雀踊子
ハンドバッグを開くと女の貌がある　智子
両の掌を開いて過去を閉じこめる　滋雀
お開きをしてから幹事腰をすえ　三十四
小包を開くと母が匂いだす　たつお
眺望が開けて吹雪息をする　水客
借りに来た人にも自動ドア開く　天笑
ママロを開けばいつも勉強しいや　幸太郎
スポットライト師匠が開く舞い扇　潮花
酒樽を開くうれしい演技です　太茂津
開運を開く印鑑かえてみる　山久
こぶし開いて小さな夢を盛って見る　寿子
雨宿りするだけなのに自動ドア　英子
胸ひらく思いで個性ほめあげる　太茂津
美しい心に心開かれる　弘生
切開の胃とは思えぬ飲みっ振り　吸江
開運のみくじうれしい音を立て　幸太郎
一つずつ花びら開く影うごく　潮花
開いたらみくじに嘘を並べられ　雅風
玉手箱開く度胸を持たず老い　紫香
開く背に誰かが嘘をのせている　与呂志
まま母へやっと心の扉が開き　文秋
付き合えば開けっ放しのお人好し　笛生

席題「お年玉」　**中田たつお選**

電気屋へ凄い寒波のお年玉　天笑
成人した孫から貰うお年玉　綾珠
うれしくて辛い子からのお年玉　太茂津
年玉を書留にして初春を待つ　吸江
お年玉へもうデパートが開いている　恭太
間違えた年玉返せとも云えず　水客
昔なら家建つほどのお年玉　憲祐
お年玉もらうどの子もいい返事　〆女
お年玉孫の予算を先に聞く　憲祐
お年玉子供が来ると怖くなる　鬼遊
お年玉もらう方から値上げする　右近
下馬評は不景気というお年玉　頂留子
お目出度う言われて気付くお年玉　憲祐
お年玉そっとわたして子に甘え　太茂津
年金の暮しに痛いお年玉　右近
大学生に年玉の要不要論　幸太郎
当然のように受取るお年玉　吸江
ドラエモンの袋に入れたお年玉　静歩
孫の声電話で送るお年玉　糸葉

大凶のみくじも神のお年玉　柳宏子
母さんにもう預けないお年玉　潮花
お年玉渡しただけは飲んでくる　吸江
お年玉あげる倖せだってある　糸葉
珍客が裸で呉れたお年玉　滋雀
鍵っ子へ親子が揃うお年玉　柳宏子
お年玉誰かがくれるまで待とう　与呂志
這う子にも心を配るお年玉　滋雀
虹を織る少女に上げるお年玉　酔々
年玉が三日で消えた子の日記　桐下
吉報が来たのではずむお年玉　酔々
姉ちゃんの彼氏がくれたお年玉　小路
ラジコンの店へ駆け込むお年玉　静歩
お年玉が足らずお餅がうまくない　弘生
お年玉と凧陸橋を駈けて行く　作二郎
合格まで預っておくお年玉　恭太
軍鑑を欲しいと思うお年玉　岳人
守銭奴にならねばよいがお年玉　湖風
算数はしっかりしてるお年玉　花村
お年玉一人息子は貰い過ぎ　　度
親類のない子へ罪なお年玉　天笑
ラジコンにすこし足りないお年玉　たつお

兼題「伸びる」　香川酔々選

ふる里で老母と伸びのび三ヶ日　静馬
福寿草伸びては貴婦人には成れぬ　曲ん手
伸びざかり柱の疵がママを越し　どんたく
背が伸びて親の意見をはね返す　優
無理矢理に伸した鉄がすぐに折れ　清女
伸びなやみ甘い話に耳を貸す　恒明
皺伸ばすパック鏡が笑うだけ　潮花
伸びきっていても夫婦と言う絆　智子
グラフ表伸びて友人ひとり減る　英子
引き伸ばす写真極楽へ行く笑顔　憲祐
運命線どこまで伸びる事業欲　太茂津
急斜面天災忘れた街が伸び　恭太
きき耳へ退屈な爪伸びている　水客
伸び伸びと育って善を疑わず　射月芳
太陽に呼ばれ草木は背伸びする　頂留子
健やかな両手両足湯に伸ばす　小松園
あすの芽を伸ばす童話の中の子よ　規不風
罪深い男ですぐに手を伸ばす　涼一
伸び縮みそんな器用は持ってない　凡九郎
大砲を作ると売上げ伸びるなり　岳人
杉木立恵みを抱いて天に伸び　喜風
棒グラフ伸ばせば強い風当り　糸葉
子の伸びる速さうかうかしておれず　瓢太
しなやかに伸びた足から春になる　夕花
里帰り本家の嫁が伸びるだけ　健司
和解した朝の化粧がよく伸びる　〆女
肩書がなくても髭は伸びてくる　鬼遊
伸び切った凧を見ている晩年よ　作二郎
アワダチ草伸びるにまかせ地価上げる　英子
串カツが序曲南へ足が伸び　小路
十日戎おっさん上手に飴伸ばす　善紫
背伸びした分だけ絵馬に無理をいう　憲祐
砂の塔天まで伸びるわけがない　酔々

兼題「眼鏡」　若柳潮花選

ヅカガールと同じ眼鏡をうれしがり　静馬
チンピラの気まぐれに外せぬ黒眼鏡　静馬
お見合が見落していたコンタクト　どんたく
眼鏡越しに見られ宝石店を出る　〆女
めがね掛けても家計簿の字は赤い　桐下
鑑定の眼鏡へ宝石無表情　好郎
サングラス外せば別な顔が出る　翠光
眼鏡かけぬとだらけた顔になり　あいき
度のきつい眼鏡いじわるそうに見え　文秋
美人見る時のめがねは遠視です　規不風
度の強い方で保証書読みなおし　重人
眼鏡ふきふき断る言葉考える　吸江
老いらくの恋を編んでる鼻眼鏡　小雅子
真実をみたくて眼鏡買いに行く　糸葉
眼鏡屋の主人の眼鏡おだやかで　眉水
ずりそうな眼鏡で小言ばかり云う　紫香
めがねはずせピンタとんでくる　栞
眼鏡はずせばみっともない顔になり　天笑
再会のうれしさ眼鏡くもらせる　糸葉
鍋囲む席へ眼鏡が邪魔になり　瓢太
洋服と和服眼鏡も変えて出る　たつお
虫めがね覗く子供の好奇心　悦郎
サインから逃避をしたい黒眼鏡　千代三
プレイボーイとしての眼鏡は別にもち　涼一
乱視です眼鏡かけてもまた乱視　凡九郎
老眼鏡妻と共有して平和　恭太
野仏は野にあり冬の眼鏡拭く　作二郎
虚脱した瞳をかくす黒眼鏡　千代三
老眼鏡欲しい女の赤い髪　柳伸
偽ものを見抜く鑑定眼鏡ふく　多久志
サングラス掛けて世間を甘くみる　糸葉
臆病の気持ちをかくすサングラス　悦郎
悪女ぶってみてもなれない色眼鏡　形水
眼鏡でもそろそろ難儀する活字　小路

色眼鏡だったと知った破局の日　弘生
父も母も僕のめがねから消えぬ　規不風
舶来の眼鏡瞳が濁ってる　史好
度のきつい眼鏡の奥で妥協する　水客
感情の起伏眼鏡の底にある　翠光
言い過ぎた朝の眼鏡の曇り拭く　亜成
プラス十五こんな眼鏡で見る世間　潮花

兼題「鶏」　大坂形水選

軍鶏に千軍万馬の向う疵　右近
鶏鳴を晴耕雨読にした余生　小雅子
モーニング着た鶏が来る年賀　好一
農を継ぐ男一番鶏と起き　湖風
軍鶏出陣河内音頭で囃したて　三十四度
なんと小さなマンションに住む鶏よ　天笑
レグホンよいちどは土を踏みたかろ　恒明
河内弁しか通じない軍鶏である　鬼遊
太らないように鶏生きのびる　たつお
闘鶏のむしろを囲む欲と欲　翠光
雄鶏を知らないままに産みつづけ　柳宏子
人間のエゴは翔べない鶏にする　酔々
一日一善ボス鶏にえさをやる　作二郎
鶏敗けて河原に寒い陽が落ちる　幸太郎
喧嘩鶏けしかけている河内弁　水客
尾長鶏ふるさとの唄忘れかけ　勝美
風見鶏日本の向きを考える　静歩
軍鶏の眼のけわしくけわしく冬の天　千代三
風見鶏愛を告げたい風の向き　岳人
鶏小屋の鶏が見ている兎小屋　射月芳
鶏が暁を告げ旅に出る　涼一
鶏の鳴くまでに金庫を閉めて逃げ　哲寿
いろいろな鶏が居る賀状来る　小松園
鶏の下から閉じる眼を見詰め　涼一
しめられる予感へ鶏の落ち着かず　桐下
鶏を飼えば絵になる里の駅　涼一
増税へ鶏もだまされたと思う　柳伸
酉年のトサカの赤に注意する　多久志
卵の値下っても鶏生み続け　静馬
大きな蚯蚓にひよこ総がかり　酔々
木枯しに悲しくなった風見鶏　夕花
闘鶏の足の細さとしたたかさ　多久志
しめられる朝のひと時鶏の恋　好一郎
鶏が鳴いて決断まだつかず　作二郎
尾長鶏の尾は翔ぶ意思を遠くする　形水
餌を拾うにわとり犬と仲が良い

兼題「宝」　若本多久志選

平凡な生活こわした宝くじ　天笑
子宝とも思い重荷とも思い　好郎
人間国宝小馬鹿にされた過去もあり　好郎
子宝を育てる汗は甘い汗　どんたく
子宝を二人と決めたハネムーン　幸太郎
百姓の家宝ご先祖からの土地　笛生
子宝が背く日バット振りかざす　英子
子宝に四番打者のない悩み　憲祐
子宝どころか田を売り山が消え　あいき
騙された言葉宝にして生きる　太茂津
ひと粒の米を宝に育てられ　桐下
宝島童話の姫は年とらず　悦郎
子宝にやがては叛く血が流れ　たつお
七宝に欲無く男無口です　重人
父の宝は千人針の弾丸のあと　たつお
多宝塔歴史の重み信じよう　水客
生きている命に勝る宝なし　岳人
みかん箱に僕の宝がつめてある　柳宏子
子宝とようこそ思う屠蘇を酌む　小路
かぶと虫こんなもんでも子は宝　静歩
再会の指にダイヤは消えていた　恭太
正倉院シルクロードを来た宝　作二郎
宝とは花楠母の匂いする　静馬
宝石のセールス女難を自戒する　酔々
蝶の羽根蟻は宝として運び　夕花
臍の緒を宝のように仕舞い込み　多久志
おんなには見せてはならぬ宝物　好一郎
国宝の仏に願いなどかけぬ　雀踊子
宝船の一人ヒタイが目立ち過ぎ　涼一
駄菓子屋にある少年の宝もの　鬼遊
掌中の宝は自惚れからこぼれ　滋雀
人様の宝をワイワイ騒いでる　恒明
百万分の一へ賭けてる宝くじ　好一
宝くじ庶民は蜃気楼に賭け　恭太
宝くじ今年も末尾一字当て　三十四
国宝の仁王へ春の紙礫　静歩
子宝にしたくて平手強くなる　健司
つけ物の石が宝と母が云う　千代三
子宝をいと簡単に水にする　形水
母の手の温み我が家の宝なり　岳人
子宝のわけ晩年をかみしめる　文秋
信じてる夫を宝として仕え　悦郎
金銭で買えぬ宝が胸にある　射月芳
ねんねこで宝すやすや眠ってる　規不風
鍵かけた娘の引出しにある宝　多久志

（高杉鬼遊・整理）

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。

菜の花句会　高杉　鬼遊報

これは拾いものよい嫁来てくれる　善　紫
先代の苦労を神話のように言う　度
たかが豆腐と思うけど箸はなるようにしかならぬのに急ぐ足　凡九郎
国造り神話の雫小さすぎ　形　水
豆腐汁コメカミあたりに残る酒　柳宏子
赤電話八百屋お七が掛けている　雀踊子
十二月八日は神話になっている　酔々
拾ったは一人落し主はふたり　みずほ
背信の女に凩離れない　小松園
風呂の水止めて下さい赤電話　悦　郎
豆腐屋のあるじ少し能登なまり　弥　生
一円を拾って運がむいてくる　昭　子
極楽の道を聞いている赤電話　柳　伸
凩が人の別れを早くする　岳　人
かずのこを買う金をまだ拾わない　糸　葉
帝国ホテル出ると神話が消えて冬　栞
割り勘で湯豆腐遠慮ない同士　柳　杣
死に急ぐことはなかった敗け戦　頂留子
一一〇番したい日もある赤電話　鬼　遊
　　幸　生

城北川柳会　川口　弘生報

出直しの夫の荷物分けて持ち　満津子
出直して二度目に聞いた除夜の鐘　きくみ
バイブルを閉じて出直す顔になり　右　近
素裸で出直しをする面白さ　美　恵
職変えて出直す夫の目を信じ　利　義
出直しの僕へ福笹笑ってる　道　子
出直して来たのにやっと手形くれ　星　斗
妻という出直し利かぬ座にしがみ　公　一
出直しの夫へ好みの靴を買う　としよ
忘れ物して出直して又忘れ　ますえ
出直しを余儀なくされる友の留守　千　子
出直してよかった午後のにわか雨　左　春
南座のまねきに古都は寒くなる　ふ　み
ふるえてる昨日も今日も捨案山子　捷　一
娘出しすべてが寒い年の暮れ　寿　幸
老友は又来年も会いましょう　秀　村
出直しへ夫婦の絆よりを掛け　英壬子
孫去んで後片づけに夕暮れる　テルミ
髪型を変えてみたのに知らぬ顔　三十四
今更に出直し出来ぬ仲直り　なりこ

川柳しんぐう　川上　大輪報

無断使用したい実印そこにある　十　郎
民主主義無断で出来ない事ばかり　渓　水
無断拝借返すつもりを見つけられ　まさ子
良い事と思い無断できめて揉め　冬　花
印一つ無断で押した日の重さ　大　輪
母の胸甘えてみたい落ちこぼれ　〆　女
団らんに背を向け父の落ちこぼれ　富　子
政治家の目は落ちこぼれなど見えぬ　幸
内職の百円が知る玉の汗　儀　一
百円の楽しさカラオケ歌手になれ　喜　酔
百円も賽銭箱では未だ威張り　正　博
うすい縁たよる男の背負う影　与呂志
うすい縁水子地蔵に花絶えず　三　男
倖せのうすい女で金ためる　英　子
手ざわりで占うすいポチ袋　柳　志
うすかった亡夫の縁は母が埋め　千寿子
紅うすくうすく引いて喪が明けぬ　道　子
土壇場にきて血よりうすい仲と知り　としよ
いつまでも古い男の落ちこぼれ　雀踊子
百円のこころが温い慈善鍋　勇　太

川柳ウイロー社　前山　北海報

大評判村の娘がミス日本　万里歩
評判が国まで届き来る便り　三　石
評判の鼾ベッド割もめている　風　影
評判の小町娘に虫がつき　昭　子
評判の悪い奴らは貯めている　拝　山
評判は立てた幟の数で決め　健
評判のえくぼ一座をほほえませ　暁　舟
評判が悪くなり減る観光客　紅　渓
一笑に付されぬ評判気にかかり　カロ女
評判が立って二人は強くなり　雪　女
ひと事と思えぬ意外な子の評判　歌　子
宣伝費かけただけある好評判　つぼみ
評判のほどでなかった味の店　梨　花
物産展評判の品がよく捌け　公　女
評判を気にせやれと父勧め　千代女
評判のバーゲン漁る人だかり　北　海

川柳後楽　井上柳五郎報

旅先で他人の空似とすれちがい　つ　ね
睨みつつライバル同士の擦れ違い　七面山

すれ違い伝言板と独り言　元一
掏摸の眼が獲物見つけたすれ違い　久米雄
握手攻め両手で足りぬ嬉しい日　秋月
棟上げの餅を両手が待ち構え　番茶
ポケットに両手突っ込み職がない　胡風
俎に似た下積みの人生譜　佐加恵
阿修羅の持つ俎に血が流れ　恒洋
俎の上へ女の独り言　博友
俎のへこみに亡母の詩があり　白龍
俎に人類がのる原爆忌　草風
幸運へ目の色変えて十二月　鮫虎狼
幸運を夢で摑んだ手がしびれ　定平
幸運を背にして生きる雑魚である　玉水
幸運の風が背中を通りすぎ　青銅
粗衣粗食家風は今も変らない　桂風
玄関に花一輪が待つ家風　恒洋
女系図に家風しっとり生きており　柳五郎
関白宣言2DKにもある家風　正一

七人の敵に石火を切る家風　梁太
父の夢子の夢風呂の中にある　芳明
風呂上り子供が寝たからストリップ　照路
銭湯へ唐獅子ひとりいて静か　博基
若い日が昨日のように追うて来る　忠三
若い日は一直線の道を行き　哲郎
若い日のアルバム妻もかしこまり　九坡
若い日があったか妻の寝顔見る　宏大
若い日を語って嫁をくつろがせ　たけ志
すれ違う意見明治の父といて　葵丘

一三夫逝く

堀口塊人

朝寝癖そのまま醒めぬ人となり
一三夫逝く上方文化のみおつくし
よう来たと須崎豆秋さんにこり
生涯を塔守として鰻谷
編集の型に奇骨のあからさま

にた川柳会　西村早苗報

汝の敵愛して落した原爆か　鉄花人
言い過ぎであったと気付く戻り道　古迷
初霰肉の売り場が混んでくる　登美也
掘ごたつ老いの黙して和に対す　独仙
なつかしきものにふるさと祭り笛　きみえ
逢いにゆく自信へ足袋をはきなおし　孝華
病窓を開けて初雪ですと見せ　亀甲

美しい嘘病を慰める　巡歩
長崎の鐘に戦後がまだうずき　花子
年齢だなと思う動作を歯がゆがり　〆女
曲り角振り返りたくなる惑い　多賀子
年金が旅の絵葉書貯めてゆき　裕
この筋が四三で勝てる石が待つ　三和
雪女地蔵にかぶす帽子編む　夢酔
俺と貴様と臍を出しての高笑い　栄
身の上が似てきっかけとなった思慕　雄々
残されて独りで歩く長い道　寿美子
花札を二人のルールでする夜長　弘朗
ふところがわびしいサンタと向かいあう　早苗

川柳大阪　西岡洛酔報

宴会帰りが飲んでいる屋台店　善紫
あやまれば良かった悔の残る酒　真佐志
珍客が肩を叩いたバス乗り場　徳松
膳ひとりカレーライスを箸で喰べ　六龍子
それなりに任務を背負う芽は育ち　君枝
縺れ糸未練な老でたち切れず　希久志
法守る番人法のザルくぐり　秀峰
時刻表日本列島ほしいまま　喜酔
指だこは木彫工具を可愛がる　三十四
あといくばく命の秋をとぶバッタ　雅巣
紋付きがしっくりしない額の父　本蔭棒
結論をせかすと女の意地が見え　与呂志
十円のことでだんだん声高に　比呂志
苦しみの中で見つけた仏さま　洛酔
金大中殺すな世論わき起り　敏
愛妻の失敗ならば許そうか　眉水
名人も失敗あって今がある　二天坊
失敗の便箋を積み恋すすむ　道子

失敗を許す心に愛がある　酔花

南海電鉄川柳会　辻　圭水報

和に徹し人より遅い怒りよう　小松園
家庭の和父は黙って上に座す　清女
白扇に心ほのぼの和の一字　いづ枝
和を以て貴し人に儲けられ　雅風
淋しさに孫の一言和を作る　東雲
和を守る夕げの光あたたかく　儀一
和やかなひとみが私の胸を射る　維久子
和の心芽生えて解けるわだかまり　信江
エゴ一人和みの酒をいらだたせ　宏子
和にもひげ政治漫画が恐くなる　ミツエ
和を説く首相に派閥つきまとい　圭水
お互いに誤解してたを和解させ　綾珠
老四人昔話の和やかさ　勝美
愛妻の弁当職場まで和ごみ　正行
人の和を教えてくれた人に逢う　さよ
杉良の見せ場にしびれる大年増　栄美子
名優は見せ場心得客泣かす　白梅
ヘボ役者ここが見せ場と力入れ　正流
赤城山忠治の見せ場子が覚え　泉秋

京都塔の会　松川　杜的報

先生もええとこ見てる同意見　求芽
十円の喜捨雲水の深い礼　王石
駅の名に浦の字がつき海近し　杜的
まだ前の板場が居てる浜の宿　紫香
真暗な闇へ沈んでゆく女　潮花
幸福と思う旅路も今日終る　芳子
ポックリ寺のついでに寄った萩の寺　飛鳥
土いじり土の正直さ肌で知る　明代
上弦も下弦も絵になるお月様　白李
西瓜の種取り取り女の愚痴を聞く　遊香
みちのくの冷夏へリンゴ負けじとす　俊三
対談の米朝に背広が似合う　水客
バスが来て田に押し入れる稲車　笛珠
シャッターを押せばカメラの中も秋　花代子
押しの一手で別嬪の妻めとる　三求
風が押し戻して代打も打ちとられ　白渓子
風邪押して出る責任のあるポスト　誠史
長尻に渡りに舟の訪問者　弘三
解熱してあれもこれもと気にかかり　美穂

岸和田川柳会　植山　武助報

ふるさとが恋しく切抜ためている　ひで
飲めそうな人程うまく席を去り　義秀
定退者人も時間もソッポむけ　辰雄
近距離の人が時間にすべり込み　こう
時間待ちやたらに多いローカル線　善吉
二時間で神は他人を結びつけ　冨志子
木守りの柿が絵になる空の青　春栄
後山の紅葉か杉の間から　民治郎
かたつむり角出せ槍出せ親心　加仙
思い出の一つの鍵は閉じたまま　武助
寝たきりの弔い終えた虚脱感　希久志
温泉でしみじみ歳を知る素肌　さよ子
鼻折れた天狗転職考える　みずほ
魔の一夜明けて毛布とにぎりめし　信夫
文添えた捨て児毛布の親心　白光子
とも角も毛布でくるみ救急車　操子

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

ドングリのコマも孫等の宝物　歳栄
金と地位ひままで出来て脱線し　タケノ
脱線もさせてそらさぬ名講師　清泉
脱線も予算に組んだお小遣い　輝水
桐一葉今日の風にもたじろがず　ばるみ
意地っ張り何んのかんのと意地通し　清夢
過去一つ消して音澄むオルゴール　美栄
どんぐりのような目をして叱られる　敏明
オルゴール　コケシ黙って聞いている　酔夢
モシモシと電話の向うにオルゴール　恒星
底意地のみにくさなどは持つまいぞ　鈴江
向き直るおんなの意地の青光り　白汀

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

温泉へ来てまで良心すりへらし　孤呂二
教祖から政治へ切れぬひものび　鳳人
温泉で逢うてはならない人に逢い　栄
温泉の湯気くる年の鐘となり　早苗
哀しむなロックの教祖で婆娑に生く　芳枝
温泉源当てて町政ゆれてくる　愚童
改造の納屋で教祖が太鼓打つ　耕草
教祖から分れる一派若い核　三和
外閧を気にして内助の皺が増え　与根一
グループの中の一人がうなづかず　登美也
外閧を恐れ急くまま辞表書く　巡歩
気狂いにされた過去などある教祖　舞吉
グループの中に路線を乱す奴　通児
今日は男と女で行く温泉　鶴丸
幸福を説いて教祖の不幸せ　叮紅

川柳高知　川竹　松風報

飲んで寝るだそれだけの世帯主　三吉
愛してる内は過去など気にならず　菊野
空っぽに頭をすれば肥えてくる　秀子
本当の味方に出会う素顔です　節
陶酔の時刻を戻してみたい日も　麗子

腕ずもう親を本気にさす育ち　広風
献立を隣りの竈におしえられ　甲子
シャボン玉丸さをのせる程の風　登舟
日だまりを追う母親の小さな背　克子
ポケットの金貨が騒ぐ赤電話　富久子
良いことの聞える老いの耳でよし　松風

虹川柳倶楽部　新岡回天子報

寒い風背向けしばし立ち止まる　実
河豚料理命を賭けてまで食えず　勝一
気違いと言われ老いては馬鹿になり　素石
夕立ちがきれいな虹をおいてゆく　紫浪
こんな花咲くであろうか種袋　一竿
悪い夢待ちもせぬのに続きあり　四郎
定年の髭剃って来る年金日　義美
正常へ復る脈搏陽がまぶし　久仁於
もの言えば涙を誘う通夜の席　掬治
何もかも二流に慣れて薪を割る　虹汀
超一流河豚は有難とよばれたが　回天子

七面合同句会　中筋　三幸報

プレゼントしたネクタイで今日も逢い　晃
情こもる添文もあるプレゼント・　文厚
プレゼント孫には甘い父であり　フクヨ
プレゼントあれこれまよい金になり　隆子
ぬくそうな嫁の名で着くちゃん〳〵こ　君子
むねにしむ温かき人のおくりもの　千香子
愛重くなってしまったプレゼント　知也
一億の多忙ラッシュに見る姿　勇次
名物を売って多忙な日々に慣れ　千秀
多忙でも飛んでくるよな奴がいる　啓子
毎日が多忙一泊の旅楽し　宣子
麻雀もゴルフも入れて多忙です　五月

プレゼント赤のリボンが花になり　光治
爪に火を灯す男のプレゼント　周穂
酒好きでやっぱり酒をプレゼント　隆恵
そろばんのリズム多忙を知っている　三幸

川柳化粧櫓　植村客遊子報

そんな唄あんたの齢が解かります　紅月
平社員の方が貯めている貯金　秋月
プロポーズして二、三日落ち着けず　岳詩
童心にかえれと孫に教えられ　葉香
跳び箱が越せぬ肥満児悲しくて　奮水
子の夢が笹をはなれて飛んでくる　実男
店を嗣ぐ妥協自動車買わされる　越山
ウインクをされてチップを多く出し　永楽
好きだから好きとは云わぬ愛があり　大鷹
定期券微笑で手話の児が通る　秋峯
棟上げて神主さんも祝酒　きよゑ
ウインクを合図に二人はそっと抜け　柏秋
一寸した手違い不信感持たれ　客遊子

川柳ささやま　河原みのる報

横車押して孤独の渕に佇ち　ゆう也
愛うすき女で闇を押して生き　文平
どん底を押し上げられた手が温い　靖子
押せば出るうどんに冷えた身をぬくめ　房子
運針へいつしか女になっている　可住
筋書きの通り運んで主役の死　ゆきお
曲芸のようにそば皿露路運ぶ　和子
嫁迎え入籍承図書き添える　近郊
胎の児へ迷わす名前書き並べ　美智子
出稼ぎの夫へ良い事だけを書き　テル
校長はわがせいにしてしぐれ詫び　みのる
降り込むと云うてしぐれを喜ばれ　素水

しぐれても母は祭りの芋洗い　エキオ
腹の立つ薄いもみじにしぐれられ　ひか平
しぐれても男の意地を張り通し　八陣

駒つなぎ川柳会　里　小路報

足音の後ろに別の僕がおり　柳仙
テープ切る子の一瞬がピンボケで　小路
王よりも飛車が大事と云う初心　勝美
初心者ばかりかと高をくくられる　善紫
無器用な男で初心諦らめず　みずほ
入社式社員の澄んだ目を信じ　信治
初心のままで死にたく思う薄化粧　雀踊子
泥水に染まり初心へ背なを向け　柳伸
行詰まるたびに初心に立ちかえり　柳宏子
逆境になっても初心崩さない　美乙女

佳句地10選

（前月号から）

都倉求芽選

捨てられた姿で葱は根をおろし　笑痴
嘘でよし心休まる言葉なら　千万子
流れ星女の返事またのびる　小松園
一日を急ぐレールが敷いてある　可住
下座で打つ太鼓は雪の音になり　潮花
幸せの隣に私を置いて見る　淳子
祀られてきつねは少し自惚れる　糸葉
モデルある日嫌いな靴をはかされる　度
同じ名の美人にちょっと嫉妬する　藤子
なんにも知らぬ女で一番強くいる　君子

名優のまだ冷汗が出る初日　恭太
初心なことベンチの上を出ない恋　小松園
ヌーボーとしてアイデアマンである　凡九郎
アイデアに余計な金がかかりすぎ　育園
アイデアで勝負と社長からハッパ　頂留子
初心忘れた思い上っている日日　白兎
手を触れただけで心臓つぶれそう　千代三
野仏に両手合わせている初心　酔々
思い出の初心ネクタイ知っている　美代
初心などとうにないさと倦怠期　雅風

南大阪川柳会　中川滋雀報

盛り場へ沈み戻らぬ花の彩　滋雀
石女がペットへきかす子守唄　憲祐
野良犬はペットの頃の夢を見る　静香
ペット抱く女独居の夢が足り　喜風
機械化が年期の腕をうとんじる　楓楽
腕一つ拳を握るだけにある　凡九郎
腕みがきに来た大阪で屋台引く　あいき
逢いに行く心がはやる急ぎ足　好一
馬鹿正直なタイムカードへ急ぎ足　文秋
急ぎ足で来たのに臨時休業札　頂留子
確かめるまでは空似へ急ぎ足　雅風
盛り場で脳波の狂い出す家出　度
盛り場の朝は野良犬だけが起き　洋子
盛り場に育ち夕方から冴える　弘生
鏡の中でいつも不足ばかり言う　君子
学期末勉強不足の付けが来る　智慧子
何もかも不足で酒は欠かさない　千代三
くつろいで夫婦は死ぬ日の話する　智子
家中が疲れる父のくつろぐ日　柳宏子
食べたい時食べてくつろぐ妻の留守　勝美

川柳後楽　井上柳五郎報

神様の判断努力が足りませぬ　照路
専守防衛遺影に判断聞いてみる　芳明
判断の甘さは言わず弁解し　哲郎
判断へ親子の意見喰い違い　番茶
判断のつかぬお医者の匙加減　梁太
判断は他人任せの痴話げんか　鮫虎狼
許そうか許すまいかで迷う寡婦　秋月
ぼろぼろの心を洗う年忘れ　恒洋
年忘れもう一軒は逃げるとす　久米雄
年忘れどころかぎりぎりまで稼ぎ　七面山
半分に減らされもせぬ年賀状　定平
達筆に一句が光る年賀状　元一
一票を含めて届く年賀状　宏大
合点のゆかぬ処から年賀状　博友
御馳走をたべた証拠をヒゲが言い　佐加恵
天皇の髭に右向け右をする　草風
風采のあがらぬ男の無精髭　玉水
ポスターの美人に髭が生え平和　青銅
勝運のつきの髭そる嬉しい日　柳五郎

堺川柳会　河内天笑報

たのもしい花嫁ノミの夫婦が今生れ　清女
助かってわが家の棟の落ちる音　小松園
道さん子との結婚寒さ考える　眉水
能面のしずかな笑みに落付く夜　宏子
一枚のハガキ結婚したそうな　凡九郎
人様のいのちが燃えているテレビ　与呂志
結婚が決ってケチになる息子　ミツエ
枯葉はく尼僧につらい過去がある　美乙女
吉日の父の涙を探すまい　笑痴
かさこそと枯葉の対話聞く孤独　柳宏子
舞う枯葉お前もここで落着けよ　茂美
肥満もう気にせず好きなものを食べ　一二三
火災から逃れることに智恵をもち　えい子
夜店の面つけたまま寝る小さい子　康浩
北風に枯れ葉一枚耐えている　東雲
善人をびくびくさせている枯れ葉　素灯
枯葉震う身のおきどころないように　幸太郎
枯葉今日いのちの軽さ知らされる　月子
弱虫が夜店で鬼の面を買う　天笑
火事消えて角のラーメン屋もねむる　作二郎

三井ヶ丘川柳会　高田博泉報

ゆっくりと二十の爪を切り終える　光夫
駅長が目刺焼いてる通過駅　一菁
出納に痴情からめば穴があく　柳歩
帰省客駅に憶えの顔も有り　琴音
外交のスマイル菊の出来を褒め　一途
口べたが大きな仕事をとって来る　博泉
明日は晴青年北に針路とる　度
四季の花無人の駅でそっと咲き　てまり
親善へひと役買ったお人形　英壬子
省エネへ今日も太陽笑ってる　亜成
長い旅終着駅の灯が温い　満津子
駅長がラーメン食ってるローカル線　勝美
信念に神仏を藉り火を渡る　弘生
一枚の名刺に外交支えられ　晴風
閉鎖した時から鉢巻捨てている　一念
蟋蟀の足抜けたまま秋深む　亜鈍
外交の靴すり減らす棒グラフ　柳宏子
鉢巻きをしめ直してる叩き売り　野生
駅に来て悲喜こもごもの顔に会い　あいき
剃りあとに闘志が燃える朝の駅　三千子

途中下車人生行路の千切雲　小松園

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

一点の雲に船頭引き返す　度
名作の化身になってゆく女優　雅洋
ふかし芋湯気の中から母の顔　キャニオン
ダイヤには女心もゆれ動き　安竹
経験があるから父は怒らない　登
星の砂願いを指で書いてみる　光男
京の秋女優気取りで佇まう　美佐子
経験を聞かされ漢薬のんでみる　千夢
あっさりと女優を捨てる玉の輿　登
経験におぼれて前へ進まない　有一
垂直に立ちやじろべえに不安ない　亜成
ソロバンの玉へかけ引きの指が来る　一扇
再婚の花むこ笑顔をたやさない　博泉
一生に一度は経験したい椅子　野生

女優の名言えば出てくる店の品　百合子
新劇の女優も叙勲される秋　聖地
金魚鉢の中で女優が泳いでる　一念
付き変えて見せる切り札握りしめ　形水
養老院にいてまで派手な元女優　入仙
経験派時の流れに耳貸さず　好郎

どんぐり川柳会　谷垣　史好報

夢を持つ胸に輝く星がある　みずほ
観光に媚びる秘仏の輝きよ　吸江
クリスマス輝く心は売ってない　雅風
母の手の輝きダイヤにも勝り　岳人
目標の家が静まりかえっている　小松園
良縁が舞い込み目標狂い出し　英壬子
難民の飢えに輝くにぎりめし　鬼遊
へそのゴマとり目標が定まらぬ　酔々
輝きは仕事に炎えている白衣　真砂

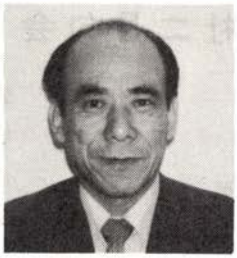
天職に今日も挑んで日が暮れる　好郎
弱いのがとっさに妙手ひねり出し　儀一
目標を子に変え父が軽くなる　憲祐
積善がやがて輝く日も来よう　瓢太
目標に日本もされる世のうつり　勝美
軍艦マーチ目標のないむなしさに　薫風
太陽を引きずるように海暮れる　悦郎
勲章の輝きよりもパンが好き　柳伸
目標が或る斜断機の向う側　柳杣
雪女とっさに溶けて水の跡　千代三
目標の蔭にちらちらする女　史好

勝山双葉川柳会　河野　君子報

母の手が荒れて今年も暮れてゆく　楓楽
夕暮れの指切り見ている子守柿　千里
多すぎるニュースを残し暮れてゆく　節子
やき芋と猫と二人の午後ぬくし　芙佐女
やき芋がくばられ話またしきり　いくの
いし焼の声に誘われねだる子よ　品子
大掃除失くしたものがひょいと出る　智慧子
古い写真が出てきて進まぬ大掃除　洋子
大掃除心のすすも払いのけ　喜代美
大掃除出したがらくた納まらず　藤子
同居して少し大きな財布買う　久子
年の暮れ出入りのはげしい財布持ち　キミエ
春財布買うて今年の運を待ち　静香
引き継いだ財布に苦労も入っとり　秋子
空っぽの財布にだって夢はある　智子
バーゲンに行くにも財布と相談し　静子
旅先の財布は浮かれようとする　君子

（香川酔々整理）

雅号ぶっちゃけばなし (195)



えぐち　わたる　江口　度

何と読むのかと聞かれて「ワタル」ですと答えていますが、これは本名。昭和三年の不況時代に生まれたので「サンズイ」を省いて、節約していけと云う意味と、世の荒波を見事に渡るようにとの願いをこめてつけたと聞いております。李白の詩の中にも「春風湖を度る」とサンズイなしで出ています。中学生の頃、度量衡の度だから「ハカル」と読まれたこともあります。渡としたり慶としたりの手紙が舞いこんで困っております。川柳を趣味と考えているうち、また句会で同音の川柳家の現われない限り、ずうっと「ワタル」で通したいと思っております ので、今後とも宜敷くお願い申します。

（会社員　五十二歳）

本社二月句会

日時　二月六日（金）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話　271・3935番
兼題　柳話　野村太茂津
「伏線」　宮尾あいき選
「ラッシュ」　高杉鬼遊選
「悪夢」　黒川紫香選
「三りんぼう」　菊沢小松園選
席題　二題　当日発表
会費　三百円
各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

3月の兼題　「雑負」　「内緒」「任せる」

本社3月句会は6日㈮6時から

3月の常任理事会は**5日**5時から

お願い

川柳塔社**同人名簿の改訂版**を発行しますので、前回（昭和五十三年十二月）以降、住所又は住居表示変更あるいは電話番号の変った方は、左記整理担当者までお知らせ下さい。

〒661 尼崎市武庫町一―四七―一五
黒川紫香

●募集

四月号発表（2月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「円満」　宮尾あいき選
「暇」　山本立児選
「碑」　浜野奇童選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「電話」　光好陽子選
「髭」　斉藤三十四選
「路」　岩本雀踊子選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

2月の常任理事会は5日5時から

定価　四百円（送料45円）
半年分　二千五百円（送料共）
一年分　四千八百円（送料共）
昭和五十六年一月二十五日印刷
昭和五十六年二月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話　大阪（06）三七一―三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番
三和銀行心斎橋支店
普通預金口座番号・一〇二七八三

肉体疲労時のVB₁補給に——
アリナミンA
アリナミンA25の効能＝肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB₁補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社　〒541 大阪市東区道修町2-27
タケダ

・編集後記・

☆不二田一三夫氏が、かつて「ああ二月号」という一文を書いて嘆かれた通りの暗い二月号となった。☆一三夫氏を悼む句を寄せられた堀口塊人氏が後を追うようにこの世を去られた。☆同人の与史・可保留両氏のご冥福をお祈りする。☆竹内紫錦氏からユニークな原稿を頂いた。氏は科学者で今は翻訳一筋の専門家なので読み応えがある。☆古句研究も廿六篇に入った。長丁場で地味な読物だが、ファンは意外に多い。メンバーの方達、新たに加わって下さった方に深謝申し上げる。☆年末年始の郵便事情の悪さは相変らずな上に、北は豪雪という。冬場は原稿依頼にも気を遣うことだ。加うるに郵送料の大幅な値上げ。「ああ二月号」（薫）

☆このごろ腹の立つこと——「シャイニング」「エクスタミネーター」「フライングパイ」「フェーム」——これみな正月封切の洋画、原題そのまま。ズボラも程がある。☆このごろあきれること——ノーパン喫茶のコーヒー千五百円也。二度と行くもんか。☆このごろ気になること——なぜか雅号を変える人がふえたこと。☆今年はトリ年の中でも六十年に一度めぐってくる辛酉（かのととり）である。この年は古来、平地に波乱が起ると云われている。柳界に波乱をまき起す一句・一文を塔誌上に期待したいものだ。（史）

☆鬼やらう音じよう古都の闇にとびという句を作ったのも一昔。二月の行事は追儺式。奈良の興福寺では、赤鬼、青鬼登場、仏の威徳に打たれて退散。しばし現世を忘れさせてくれる。催馬楽を唱うは少し酔うた鬼たちでほほえましい鬼である。まだ、ご覧になっていない方には、一見をおすすめしたい。如月は二月の異称。いかにもきびしい音感。昭和七年二月二十二日午前六時、上海廟行鎮の戦闘で江下、北川、作江一等兵他八勇士、爆弾を抱いて敵鉄条網を我身もろとも爆破、世に伝えて肉弾三勇士。下りて太平洋戦争、昭和十八年二月ガダルカナル撤退。十九年二月マーシャル群島クエゼリン守備隊玉砕。昭和二十年二月米軍硫黄島上陸、やがて三月守備隊全滅。編集子の脳裏をかすめるこれらの史実。戦争と平和じっくり考えねばなるまい。靖国法案をめぐる駈引き防衛費増額。ともあれ平和の尊さを思うこと切。（酔）

☆ある書店で八さだ・まさし・生命ある詩〉の単行本を見た。著者は米沢寿美子と言う無名の女性である。あとがきによると、子供を死なせ、夫を亡くした著者が、毎日死ぬことだけを考えていた、ある日。〝三十歳以上の方の為のコンサート〟で初めて、さだ・まさしの歌を聴いた。感動は大きく、それから彼女は生きる決心をした。わが尊敬する麻生路郎氏は「生命ある句を創れ」と遺されて久しい。その正体が今、ぼんやりとわかったような気がする。遊びの川柳も結構であるが、器用にこなしたものや美しいだけの作品では、人を死の淵からよみがえらせることはできそうでない。そんなだいそれたことでなくとも、同じやるなら力の一句を作ってみたい。（き）

ご進物に重宝な
近鉄の商品券
★500円から50,000円まで各種ございます
先様にお望みの品をお選びいただける手軽で便利なご贈答品です　ご進物には近鉄の商品券をどうぞ
近鉄百貨店
アベノ店(06)624-1111 / 上本町店(06)779-1231 / 奈良店(0742)33-1111

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十六年一月二十五日　印刷
昭和五十六年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六四五号　川柳塔　二月号
定価　四百円（送料・本誌に限り三十三円）

気どったカッコウはきらいだ、
思いのままに
装うのはいいものだ、
熱い心を満たす
オーエスケージェフ。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN
株式会社オーエスケー

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ

豚饅（ぶたまん）・焼餃子（やきぎょうざ）
焼売（しゅうまい）・叉焼饅（ちゃあしゅうまん）

大阪・なんば
551 HORAI
蓬莱
TEL (641) 0551

《支店・出張店》
なんば高島屋　心斎橋そごう　梅田阪神百貨店　天満橋松坂屋
中之島サン・ストア　なんば新川店・新川売店　ドージマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴　京阪ショッピングモール　淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店　近鉄百貨店（アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店）

雑誌　05703－2